

I S S N 0 9 1 8 - 9 9 0 4

# 伊賀の考古資料 2

研究紀要 第 16-4 号

2 0 0 7 (平成 19) 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター



## 序

この研究紀要は、「伊賀の考古資料2」と題し、伊賀市・名張市の考古資料を特集しました。

県内では、昭和の末から平成のはじめにかけて、大規模な開発事業に伴い、多くの遺跡の発掘調査が行われました。そのなかで現地での調査に比重がかたより、資料の公表が後手に回っていた現実があり、重要な資料が、ほとんど活用されないままとなっていたことは否めません。

三重県埋蔵文化財センターでは、この反省をもとに、公表が充分でなかった資料を逐次公表し、広く公開していきたいと思います。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水 康夫

## 例 言

- 1 本書は、三重県教育委員会が昭和 50 年度から 62 年度にかけて緊急発掘調査を実施した遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
- 2 本書で掲載する遺跡と調査年度、原因事業名、発掘調査現地担当は以下のとおりである。

清水北遺跡・清水北古墳	(昭和 50 年度木津川河川改修事業)	調査担当: 吉村利男・伊藤克幸
安田氏館跡	(昭和 61 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 稲垣良二
塙本館跡	(昭和 61 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 増田安生
田中氏館跡	(昭和 62 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 田中久生
四ノ坪遺跡	(昭和 61 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 稲垣良二
鳥羽遺跡	(昭和 62 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 田中久生
浦遺跡	(昭和 60 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 仁保晋作
坂之上遺跡	(昭和 62 年度県営圃場整備事業)	調査担当: 東 浩成・野原宏司
- 3 本書のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 4 本書の作成業務は、支援研究課が行った。本文の執筆は柴山圭子（I）・竹田憲治（II・III）・伊藤裕偉（III）・豊田祥三（IV）・穂積裕昌（IV）が担当した。また文責は目次及び文末に示した。

## 凡 例

- 1 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の 1/50,000 地形図（『上野』）、1/25,000 地形図（『上野』・『伊勢路』・『阿保』・『名張』）、伊賀市内旧市町村都市計画図、名張市都市計画図である。
- 2 遺構平面図で座標表記があるものは、国土調査法の日本測地系による座標第 VI 系（旧国土地標）で表示している。地形図以外の方針は真北で示している。なお、磁針方位は西偏 6° 50'（平成 12 年度）である。
- 3 土層図の色調と土質は調査時の記録をそのまま用いた。
- 4 本書での遺構番号は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
- 5 遺構番号の頭には、遺構の性格により、以下の略記号を付した。

S A = 条列・土塁	S B = 掘立柱建物	S D = 溝	S E = 井戸	S F = 焼土	S H = 積穴住居
S K = 土坑	S X = 墓・火葬穴・古墳周溝	S Z = 落ち込みなど	Pit = 小穴・柱穴		
- 6 本書での遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

縄文土器等 = 拓影 (1/3)
石器 = 剥片石器 (2/3)、礫石器 (1/3)、大型の石器 (1/3)
金属製品など = 1/2
それ以外 = 1/4
- 7 本書内では、「つき」は「杯」、わんは「椀」に統一した。

## 目 次

I 伊賀市大野木 清水北遺跡・清水北古墳 .....	(柴山 圭子) ... 1
II 伊賀市 中友生・界外地内城館群ほか .....	(竹田 憲治) ... 15
III 名張市中村 浦遺跡 .....	(竹田 憲治・伊藤 裕偉) ... 32
IV 名張市赤目町 坂之上遺跡 .....	(豊田 祥三・穂積 裕昌) ... 42

### 挿 図 目 次

第I-1図 清水北遺跡 遺跡位置図 .....	1
第I-2図 清水北遺跡 遺跡周辺図 .....	5
第I-3図 清水北遺跡 調査区位置図 .....	5
第I-4図 清水北遺跡 道構平面図 .....	6
第I-5図 清水北古墳 石室平面図・断面図 .....	7
第I-6図 清水北遺跡 出土遺物① .....	8
第I-7図 清水北遺跡 出土遺物② .....	9
第I-8図 清水北遺跡 出土遺物③ .....	10
第I-9図 清水北遺跡 出土遺物④ .....	11
第I-10図 清水北遺跡 出土遺物⑤ .....	12
第I-11図 清水北遺跡 出土遺物⑥ .....	13
第I-12図 清水北遺跡 出土遺物⑦ .....	14
第II-1図 伊賀市友生付近の城館 .....	16
第II-2図 安田氏館跡・塙本館跡 周辺 .....	16
第II-3図 安田氏館跡 調査前・調査後測量図、 SE26 .....	17
第II-4図 安田氏館跡 出土遺物① .....	19
第II-5図 安田氏館跡 出土遺物② .....	20
第II-6図 安田氏館跡 出土遺物③ .....	21
第II-7図 塙本館跡 調査前・調査後測量図 .....	23
第II-8図 塙本館跡 堀・土壘断面図 .....	24
第II-9図 塙本館跡 石垣 .....	25
第II-10図 塙本館跡 出土遺物① .....	25
第II-11図 塙本館跡 出土遺物② .....	26
第II-12図 塙本館跡 出土遺物③ .....	27
第II-13図 田中氏館跡 調査区位置図、 道構平面図 .....	29
第II-14図 四/坪遺跡 道構平面図、SE10、 出土遺物 .....	30
第II-15図 鳥羽遺跡 位置図、調査区位置図 .....	30
第III-1図 浦遺跡 位置図 .....	32
第III-2図 浦遺跡 地形図 .....	33
第III-3図 浦遺跡 調査区位置図 .....	33
第III-4図 浦遺跡 道構平面図、 SK16・17・SD20 .....	34
第III-5図 浦遺跡 SH7・SB15・24、SE4 .....	35
第III-6図 浦遺跡 出土遺物① .....	37
第III-7図 浦遺跡 出土遺物② .....	38
第III-8図 浦遺跡 出土遺物③ .....	39
第III-9図 浦遺跡 出土遺物④ .....	40
第IV-1図 坂之上遺跡 位置図 .....	43
第IV-2図 坂之上遺跡 調査区位置図 .....	43
第IV-3図 坂之上遺跡 地形図 .....	43
第IV-4図 坂之上遺跡 道構平面図① .....	44
第IV-5図 坂之上遺跡 道構平面図② .....	45
第IV-6図 坂之上遺跡 SH73・13・SB82 .....	46
第IV-7図 坂之上遺跡 SB81・SH28・SB84 .....	47
第IV-8図 坂之上遺跡 SB91・89・88 .....	48
第IV-9図 坂之上遺跡 出土遺物① .....	53
第IV-10図 坂之上遺跡 出土遺物② .....	54
第IV-11図 坂之上遺跡 出土遺物③ .....	55
第IV-12図 坂之上遺跡 出土遺物④ .....	56
第IV-13図 坂之上遺跡 出土遺物⑤ .....	57
第IV-14図 坂之上遺跡 出土遺物⑥ .....	58
第IV-15図 坂之上遺跡 出土遺物⑦ .....	59
第IV-16図 坂之上遺跡 出土遺物⑧ .....	60
第IV-17図 坂之上遺跡 出土遺物⑨ .....	61
第IV-18図 坂之上遺跡 出土遺物⑩ .....	62

## 挿表目次

第 I-1 表 清水北遺跡 道構一覧表 .....	4	第 IV-1 表 坂之上遺跡 道構一覧表① .....	49
第 I-2 表 清水北遺跡 挖立柱建物・ 柱列一覧表 .....	4	第 IV-2 表 坂之上遺跡 道構一覧表② .....	50
		第 IV-3 表 坂之上遺跡 挖立柱建物一覧表 .....	51

## 写真図版目次

図版 1 清水北遺跡/清水北遺跡 .....	65	図版 4 塚本館跡/塚本館跡 .....	68
図版 2 清水北古墳/清水北遺跡 SK1 .....	66	図版 5 浦遺跡/浦遺跡 竪穴住居群 .....	69
図版 3 安田氏館跡/安田氏館跡 SK22 .....	67	図版 6 坂之上遺跡/坂之上遺跡 SH73 .....	70

# I 伊賀市大野木 清水北遺跡・清水北古墳

## 1 調査の契機

清水北遺跡は、伊賀市（旧上野市）大野木字神ノ木に所在する遺跡である。遺跡内に清水北館跡（中世城館）・清水北古墳を含む。発掘調査は、昭和50年度木津川河川改修事業に伴い、1975年7月から開始し、同年9月に終了した。最終的な調査面積は2,000m<sup>2</sup>であった。

## 2 位置と環境

清水北遺跡（1）は、伊賀市を南北に縱断する木津川左岸の河岸段丘上に位置する。遺跡の範囲内に清水北館跡、直居氏館跡の2つの中世城館と清水北古墳を含んでいる。当地的の標高は約140mで、館跡付近が一番高くなっている。

当遺跡周辺には、室町後期を中心とする数箇所の中世城館が散在している。清水集落を挟んで西側に位置する神ノ木館跡（2）では、昭和54年度の県営は場整備事業に伴って調査が行われており、館跡に伴う土塁や濠、掘立柱建物などが検出されている。また、あわせて削平された古墳も1基見つかっている。神ノ木館跡の西側には竹鶴氏館跡が存在する。北、東側に外郭土塁が残る複郭式の館跡である。

また、木津川の対岸には古墳時代前期から造営が



第I-1図 清水北遺跡 遺跡位置図 (1 : 50,000)

開始される久米山古墳群（3）が所在する。

## 3 調査区の基本層位

調査区の基本層位は、第1層が耕作土、第2層が腐植土混じりの褐色系粘土層、場所によっては砂質土、第3層が黄褐色粘土層で、遺構の基盤となるのはこの第3層である。この層の下により明確な花崗岩風化土がある。第1・2層で30~60cmほどである。第2層が遺物包含層に当たる。

## 4 検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構は、主に縄文時代後期のピット群、横穴式石室を内部主体とする古墳1基（清水北古墳）、および中世城館（清水北館跡）に伴うものである。

以下主な遺構についての状況を見る。なお、その他の遺構の詳細は後掲の遺構一覧表及び掘立柱建物・柱列一覧表を参照されたい。

縄文時代の遺構 調査区北部、清水北古墳の西側で竪穴住居（SH-47）を検出した。炉と思われる焼土の痕跡を中心にピットが円形に巡る。

清水北古墳（第I-5図） 調査区の北端部に位置する。墳丘は削平されているが、検出した周溝から判断すると内法間で径約13mの円墳である。右片袖式の横穴式石室を内部主体とし、東側に開口する。ほとんどの石材は抜き取られていたが、基底石の抜き取り痕跡から奥壁2枚以上、側壁3枚以上と考えられる。石室の規模は玄室長約3.7m、奥壁側の幅約1.5m、玄門側の幅約1.8m、中央部では約2mで、胴がやや張る形状である。玄室からは、石室外に延びる排水溝を持つが、途中から北に曲がる。地形的ななものか。この排水溝の状況から漢道の全長は現状で見られる部分と考えられる。したがって、漢道長約3.6m、石室の全長約7.3mと考えられる。

出土遺物は、鉄器や刀子のほか、土師器高杯や須恵器、高杯なども見られる。

中世屋敷に関連する遺構 今回の調査で、城館に関連する区画溝が検出された。これらは4つの区画A~Dを形成し（第I-4図参照）、それぞれ入り口も見られる。

A区では、振立柱建物や柱列が確認されており、北西隅部には入口がある。また調査段階では堅穴住居とされていたI辺4~7mの方形の遺構が4基存在する。これらは、堅穴住居とする根拠が乏しく、出土遺物などからも城館に関連する遺構と考えられることから、ここでは土坑として報告する。このうち、SK1~3は振立柱建物の棟方向とほぼ同じ向きで開削されており、周辺に数個のピットが見られる。これらと様子を異にするのがSK4で、区画溝が北東隅・西南隅に取り付く。また、周辺にピットは見られず、他の土坑に比べて深く、壁面も緩慢である。

B区では、ピットなどもほとんど見られず遺構の密度は希薄である。

C区には前述の清水北古墳が存在する。

D区はほとんどが調査区外になるため詳細は不明であるが、ピットもいくつか見られることから、建物が存在する可能性が考えられる。

## 5 出土した遺物

出土遺物には、縄文時代前期から近世に至るものがある。このうち、縄文時代の遺物については、既に報告されている（報告番号I~243）<sup>(1)</sup>。したがって、ここでは前回報告で洩れた縄文土器・石器数点、およびその他の時代の主だった遺物について記述する。遺物の報告番号は301から付した。

石器（301~317） 301~315は石鏃で、四基無茎鏃もしくは平基無茎鏃である。脚部や先端部を欠くものが多い。全てサヌカイト製である。316・317はUFである。

縄文土器（318~324） 318~324は後期前葉に属するものであろう。これらは調査区北端部の清水北古墳周辺で出土している。

石室内出土遺物（325~361） 325~327は土師器杯、328~330は土師器高杯。331~337、348~352は須恵器。いずれも田辺昭三氏による陶色編年<sup>(2)</sup>（以下、「田辺編年」と呼称）のTK43~TK209型式に併行するものであろう。341~344は黒色土器碗でいずれもA類。345~347は土師器の壺。345・346は長頸のもので、素地は白色で精錬されている。

357~361は鉄製品である。357~359は長頸壺。

357・358は脇抉三角形の壺身は片丸造。359は柳葉形の壺身で切先を欠く。片丸造か切丸造と思われる。360・361は小形の鉢。

周溝出土遺物（362~367） 362~366は須恵器。杯や長脚二段高杯、壺、提瓶などがある。いずれも田辺編年のTK43~TK209型式に併行するものであると考える。

SK4出土遺物（370~383） 370は石製の硯。373~377は信楽産の鉢である。373は小形の棘鉢。375は摩滅が非常に激しいが、4本以上の捕目が確認できる。378は信楽産の甕、379・380は壺である。これらは山田猛氏による信楽産捕鉢の編年<sup>(3)</sup>（以下「山田編年」と呼称）のIIa型式に属する。

381は土師器の小皿。底部が内側に窪む、いわゆる「へそ皿」である。382は瓦質土器の火鉢の口縁部。383は瀬戸産の捕鉢である。藤澤良祐氏による編年（以下、「藤澤編年」と呼称）の大宝3期後半に相当するものか。

SK36出土遺物（384） 384は土師器小皿。中世後半のものであろう。

SK5出土遺物（385・386） 385は土師器皿、386は銅。南伊勢系のもので、伊藤裕徳氏の編年<sup>(4)</sup>（以下、「伊藤編年」と呼称）の第4段階b~cに相当する。

SD40出土遺物（387~391） 391は土師器羽釜で、大和型のものである。

SD6出土遺物（392~402） 392~398は土師器。392~396は小皿で、393は京都系小皿を模したものか。397・398は南伊勢系の銅で、伊藤編年の第4段階cに相当する。399は瓦質土器の風炉。

400は瀬戸・美濃産の香炉。藤澤編年の古瀬戸後II期に属するものであろう。401~402は信楽産捕鉢。山田編年のIIa~IIb期のものか。

SK11出土遺物（403） 信楽産の甕。山田編年のIIa~IIb期併行か。

SK7出土遺物（404） 信楽産の捕鉢。捕目は4本確認できる。

SD21出土遺物（405~418） 405~407は土師器小皿。405は京都系のものを模倣したか。15~16世紀のものであろう。411は瓦質土器の火鉢。深鉢形を呈するものか。412は鉄鍋の口縁部破片と考

えた。413～416は陶器甕。15世紀後半～16世紀前半頃のものであろう。

S D30出土遺物（419）信楽産の擂鉢。底部内面に使用痕が顕著に見られる。

S D24出土遺物（428）青磁鉢の口縁部か。

S K 1出土遺物（430・431）430は土師器小皿。底部を欠くが、京都系の影響を受けるものか。431は青磁碗。

S D55出土遺物（442）瀬戸美濃産の陶器火鉢の台部で、「呂宋眼掛」と呼ばれるものである。

遺構外出土遺物（443～532）443～450は鉄製品。443は鉄製羽釜の口縁部。444・447は鎌であろう。445・446は刀子。448は環。断面方形の鍛造棒状品を環状に曲げて製作したもの。449は折釘。450は鏟。両先端とも欠損。451は銅製キセルの吸い口。内部に木質が残存する。

462～488は土師器。462～486は小皿及び皿。京都の影響を受けるものも見られる。487は羽釜。大和型か。488は南伊勢系の鍋で、伊藤編年の第4段階eに相当する。493～497は青磁碗で、497は見込み部に草花文様が見られる。502は瀬戸美濃産の小皿。藤澤編年の後IV期古段階のものである。504は行平鍋か。507は近世信楽産陶器を使用した加工皿。508～516は信楽産の擂鉢。514までは胎土が乳白色・粗製で、山田編年のIIa期に相当するものか。515・516は外面褐色で、516については底部内面にも描目が見られ、近世のものと思われる。517・518は近世の焰焰か。519～523は瓦質土器である。524・525は近世陶器。信楽産か。526～528は常滑産陶器の甕、529～532は信楽産陶器の甕である。527の肩部には文様が見られ胴が張る。13世紀後半頃のものか。それ以外は15世紀後半～16世紀前半のものと思われる。

## 6 調査のまとめ

今回の調査で、縄文時代後期の住居跡や6世紀後葉頃の横穴式石室を持つ古墳、中世城館に伴う遺構などが確認された。

縄文時代の遺構や遺物は、調査区の北西部にほぼ限定して検出されている。遺物のほとんどが包含層や後世の遺構埋土からの出土である。今回古墳の西側で、焼土を中心に円形に巡るピット群を建物跡と

認識し、報告した。

古墳は、平面形が右片袖式の横穴式石室を主体部とするもので、鉄畿をはじめとした副葬品が出土した。しかし、石材はほとんど抜き取られ、埴丘も削平されていた。古墳の石室内からは築造当時の遺物以外に平安中期頃の黒色土器などが数点見つかっている。このように石室内から平安中期～末期にかけての遺物が見つかる例は、他の古墳でも報告されており、この時期の古墳の再利用を示す出土遺物として注目しておきたい。

中世屋敷に閲連する遺構として、区画溝や掘立柱建物、柱列などが検出され、区画溝によって分けられた4つの敷地が確認された。周知の遺跡として認識されている単郭方形の「清水北館跡」の範囲とは様相が異なる結果であった。

A区では、堀と思われる溝の内側にそれと平行するような溝が存在しており、森川常厚氏が指摘している「逆E字区画」<sup>(5)</sup>に当てはまるとも考えられる。掘立柱建物や柱列も存在し、居住性が高い区画である。建物は棟方向で2種類に分けることができ、少なくとも2時期以上の建物群を考えることが可能である。他にもピットが存在するため、報告したほかにも建物が存在する可能性もある。いわゆる城館にあたる区画と考えられるか。また、S D38とS D 6の間に帯状の高まりがあるようで、調査担当者のメモに「土堤状のものか」の書き込みが見られる。これを土堤とすると、A区とB区の境にあり、B区には目立った遺構も見られないことから、この区画が屋敷地の外である可能性も考えられる。また、C区には清水北古墳が存在し、それを囲むように区画溝が見られる。この区画では城館に閲連するような遺構は確認できず、また中世の遺物も他の区画に比して少ないとから、古墳を意識した区画とも考えられる。

今回、A区を城館にあたる区画としたが、これを囲む溝の規模が幅・深さともに大きく異なっていることは注目すべき点であろう。A区は付随的な屋敷地で、その南側に城館の中心となる区画が存在する可能性も考えられる。

（柴山）

遺構番号	遺構の性格	時期	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
SK1	方形土坑	中世	C20・21、D20・21	SB	宋銭、青磁など出土。
SK2	方形土坑	中世	D16・17、E16・17	SB	
SK3	方形土坑	中世	B22、C22	SB	
SK4	方形土坑	14世紀後半～15世紀前半	C13・14、D13・14	SK	遺物は包上層、下層、最下層、SK上層、下層などであげている。
SK5	土坑	16世紀	B15、C15	SK	
SD6	溝	16世紀後半	E14、F14、G15ほか	SK・SD	
SK7	土坑	中～近世	C18、D18、D19ほか	SK	埋土は2層に分かれ、上層砂質土、下層粘質土。 出土遺物に幅あり（14世紀後半～近世）。
SK8	土坑	縄文	D6	SK	
SK9	土坑		D4	SK	最終的に消滅。縄文土器・須恵器出土。
SK10	土坑	縄文後期	C5	SK2	
SK11	土坑	室町	D11、E9・10・11ほか	SK	区画溝内土坑
SK12	土坑	縄文	C5	SK	
SK13	土坑		C6	SK	
SK14	土坑	中世か？	C18	SK1	
SK15	土坑	縄文	D5	SK	
SD16	溝		D5	SD2	古墳周溝の可能性あり。
SD17	溝	中世か？	H9・10、I9、J9	SD1～3	
SD18	溝		A22、B22	SD2	平面プランはつきりしない。
SD19	溝	中世か？	A22、B22	SD1	
SD20	溝		C19	SD1	
SD21	溝	室町	C11、D11	SD1	区画溝
SD22	溝	室町	C15	SD1	
SD23	溝	中世か？	B10	SD1	
SD24	溝	室町？	B5	SD	
SD25	溝		B15	SD	出土遺物の時期幅大きい（縄文～近世）。
SD26	溝		19	SD2～2	
SD27	溝		G7	SD2	古墳周溝の可能性あり。
SD28	溝	中世か？	A20、B20、C20	SD（浅い）	
SD29	溝	室町？	A17・18	SD	
SD30	溝	室町？	B7・8、C8	SD	
SD31	溝	亦生？	C6	SD3	
SD32	溝	中世か？	B16	SD	
SD33	溝	古代か？	A21	SD3	
SD34	溝		B21	SD	
SD35	溝	中世か？	A23	SD	SD39と同一？
SK36	土坑	室町？	C9、D9	SD	
SD37	溝	中世か？	D19	SD	
SD38	溝	中世	F13	SD	
SD39	溝	室町	B23、C23	大溝	
SD40	溝	中世	E15・16		
SD41	溝	吉備以降	F8、G8	SD	消滅か。
SD42	溝	室町	G8	SD大溝	
SX43	土壤基	中世	C21	SX1	
SX44	土壤基		C21	SX2	
SK45	土坑		E17・18	落ち込み	
SZ46	落ち込み		A24、B24	落ち込み	
SH47	堅穴住居	縄文	C6ほか	—	円形プラン、中央部分に填土あり。
SD55	溝	近世	D20・21ほか	暗渠	

第 I-1 表 清水北遺跡 遺構一覧表

遺構番号	グリッド	ピット番号	ピット出土遺物	建物時期	規模 東西間×南北間 (m)	主軸 (N基準)	方位 (N基準)	備考
SB48	C15	P2	土師器小片・鉄滓など	室町	2 (4.2) × 3 (6.3)	南北	N2° E	中世屋敷に伴うものか
	D15	P1	土師器片・土壁片など					
	D16	P3	土師器小皿					
SB49	D19	P2	土師器小片	室町	2 (4.2) 以上 × 2 (3.8)	東西	N2° E	柱建物か
	B18	P2・P7・P16	P2: 土師器小片・土壁片 P7: 土師器鍋片 P16: 土師器小片					
SB50	B19	P2・P5	P2: 土師器鍋片 P5: 土師器小片	室町	2 (4.2) 以上 × 2 (4.2)	東西	N2° E	SB50との切りあい不明
	A18	P1	土師器小片					
	B18	P1・P5・P15	P1: 土師器小片 P5: 土師器陶片・炭化物					
SB51	B19	P4	土師器小片・陶器片・炭化物	室町	2 (4.2) 以上 × 1 (2.6)	東西	N2° E	他の建物と方位異なる
	A18	P1	土師器・瓦器・陶器					
	B19	P1	土師器・瓦器・陶器					
SB52	E19	P1	土師器・瓦器・陶器	室町？	3 (6.6) × 1 (2.7)	東西	N4° W	他の建物と方位異なる
	SA53							
	SA54							
					2 (4.4)	南北	N2° E	柱列
					4 (7.8)	東西	N2° E	柱列

第 I-2 表 清水北遺跡 堀立柱建物・柱列一覧表

【註】

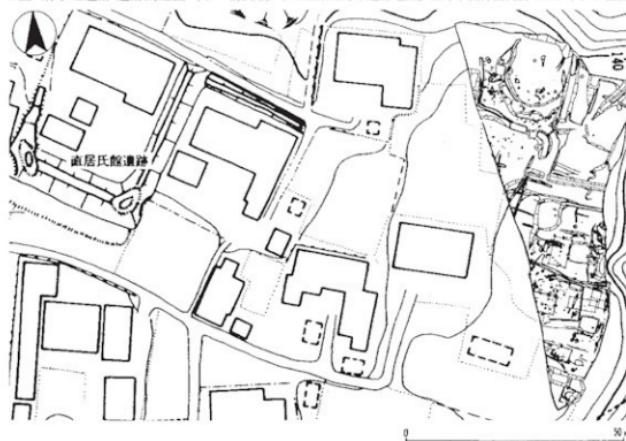
- (1) 穂積裕昌・田村陽一「上野市清水北遺跡出土の繩文土器」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- (2) 以下、陶器編年については下記の文献による。  
田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (3) 以下、信楽産陶器の編年は下記の文献による。  
山田 猛「下部遺跡群出土の埴跡」(『Mie history』

vol. 1 三重歴史文化研究会 1990年)

- (4) 以下、南伊勢系土師器の編年は下記の文献による。  
伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」  
〔(関東・東海における中世土器(煮炊具)の最近における研究成果) 静岡大学 2005年〕
- (5) 森川常厚「伊賀地域中世館の郭内区画と造構配置」  
〔『研究紀要』第4号 三重県埋蔵文化財センター 1995年〕



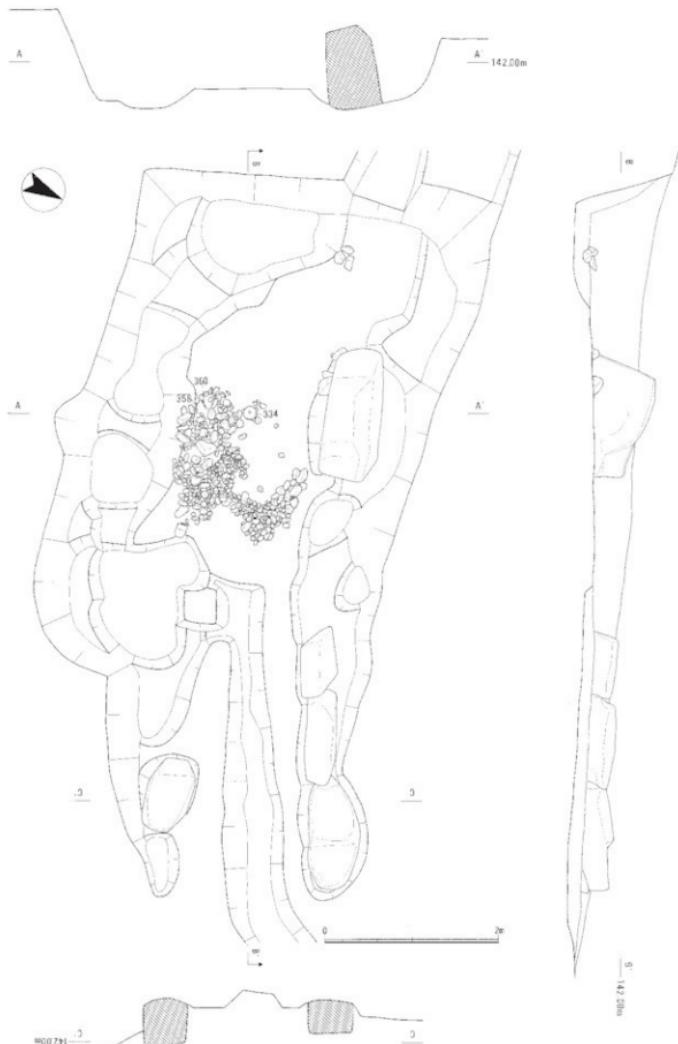
第 I-2図 清水北遺跡 遺跡周辺図 (1 : 5,000) [『三重県上野市遺跡地図』上野市教育委員会 1992年より転載]



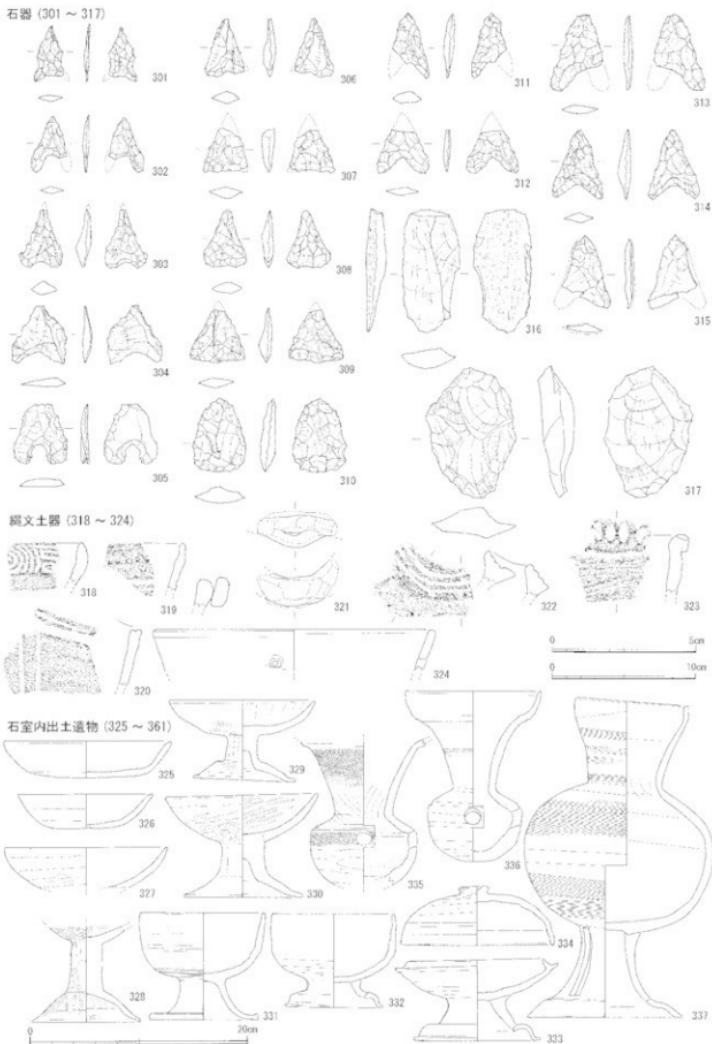
第 I-3図 清水北遺跡 調査区位置図 (1 : 1,000) [『研究紀要』第3号三重県埋蔵文化財センター 1994年より転載]



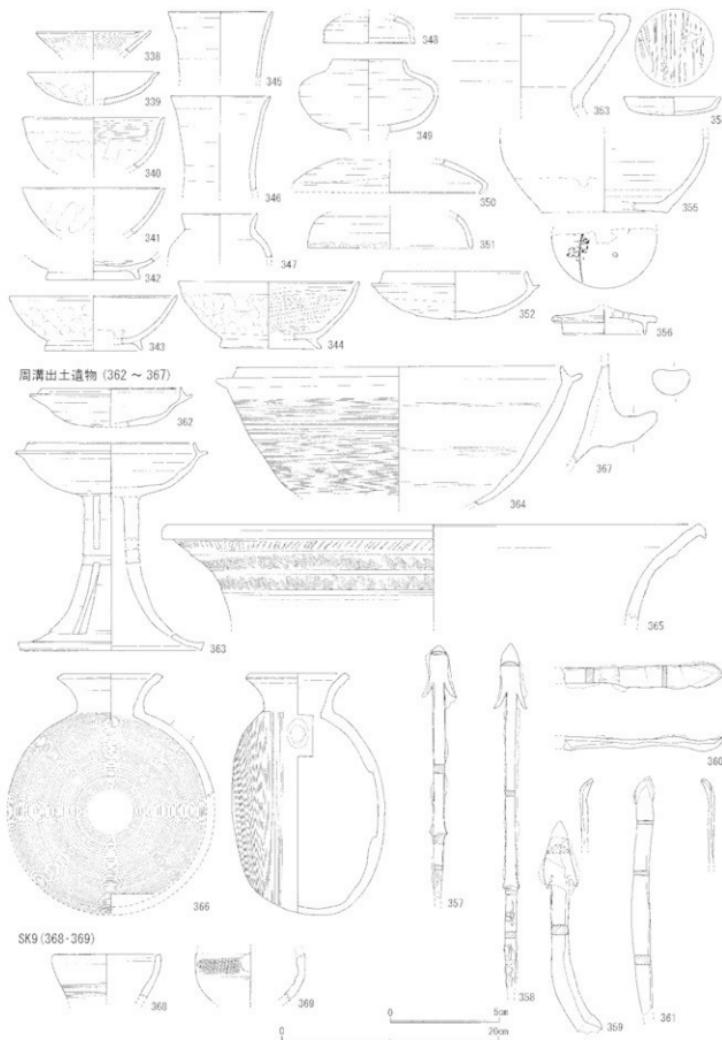
第 I-4 図 清水北遺跡 遺構平面図 (1:400)



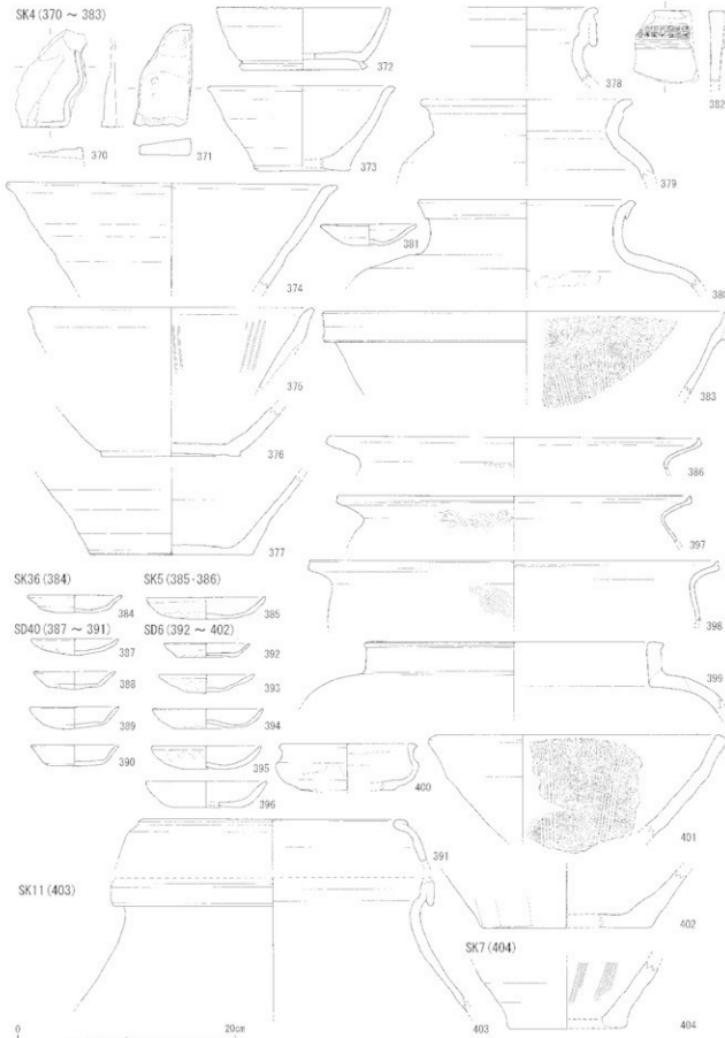
第1—5図 清水北古墳 石室平面図・断面図 (1 : 50)



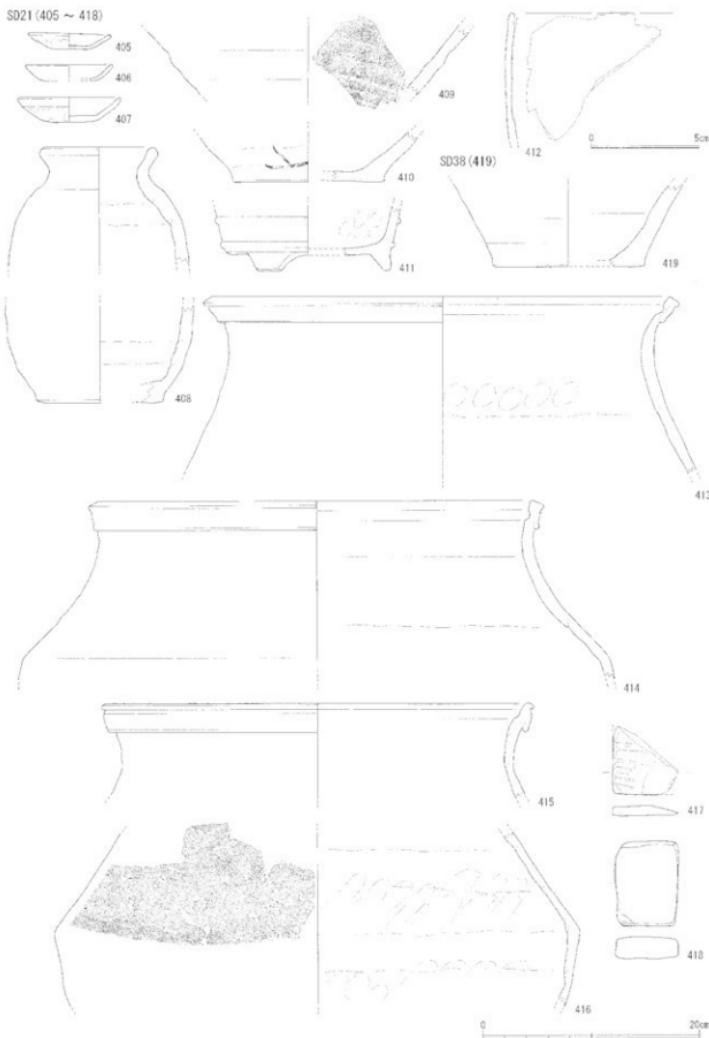
第 I - 6 図 清水北遺跡 出土遺物① (301 ~ 317 は 2 : 3、318 ~ 324 は 1 : 3、それ以外は 1 : 4)



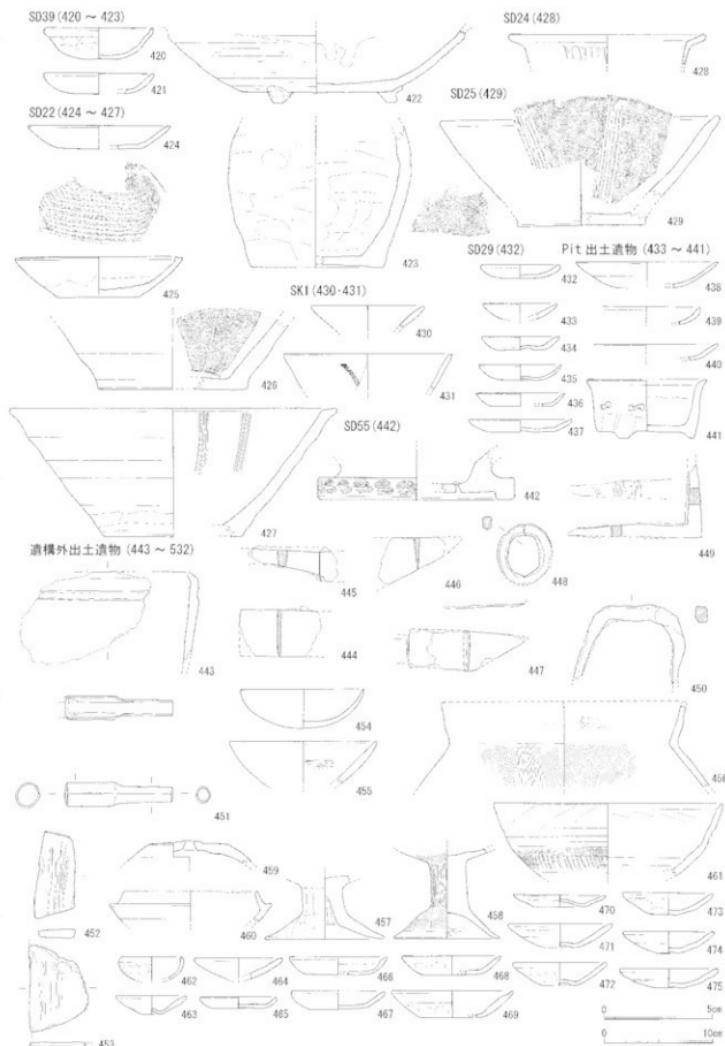
第1—7図 清水北遺跡出土遺物② (357～361は1:2、それ以外は1:4)



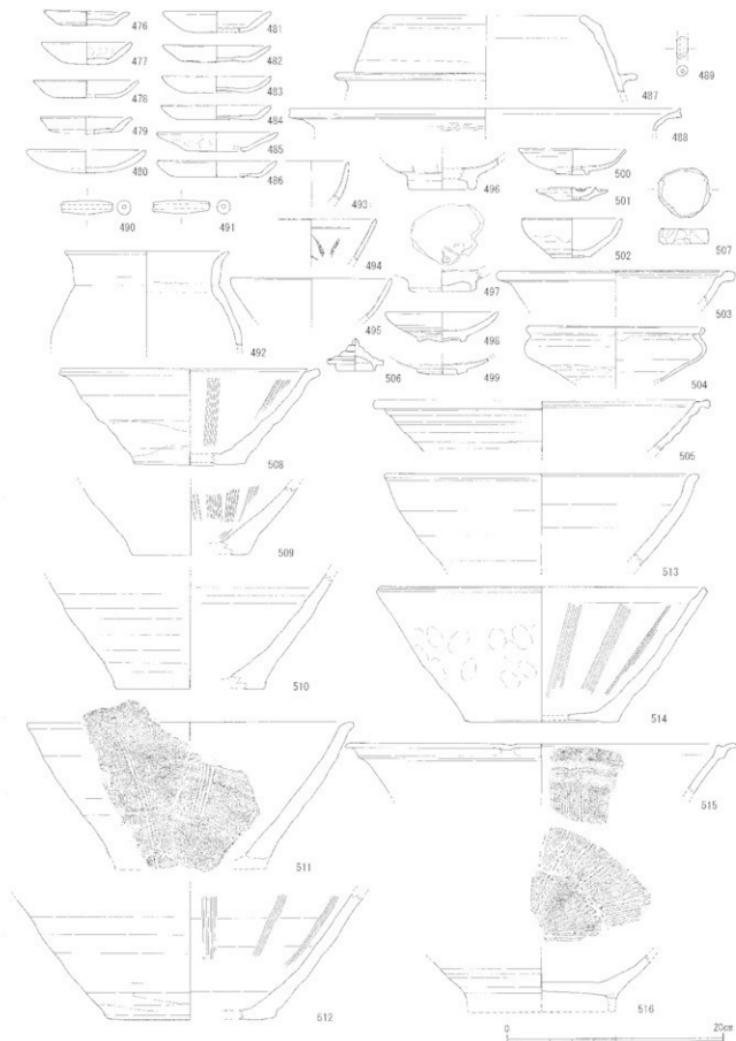
第 I - 8 図 清水北遺跡 出土遺物③ (1 : 4)



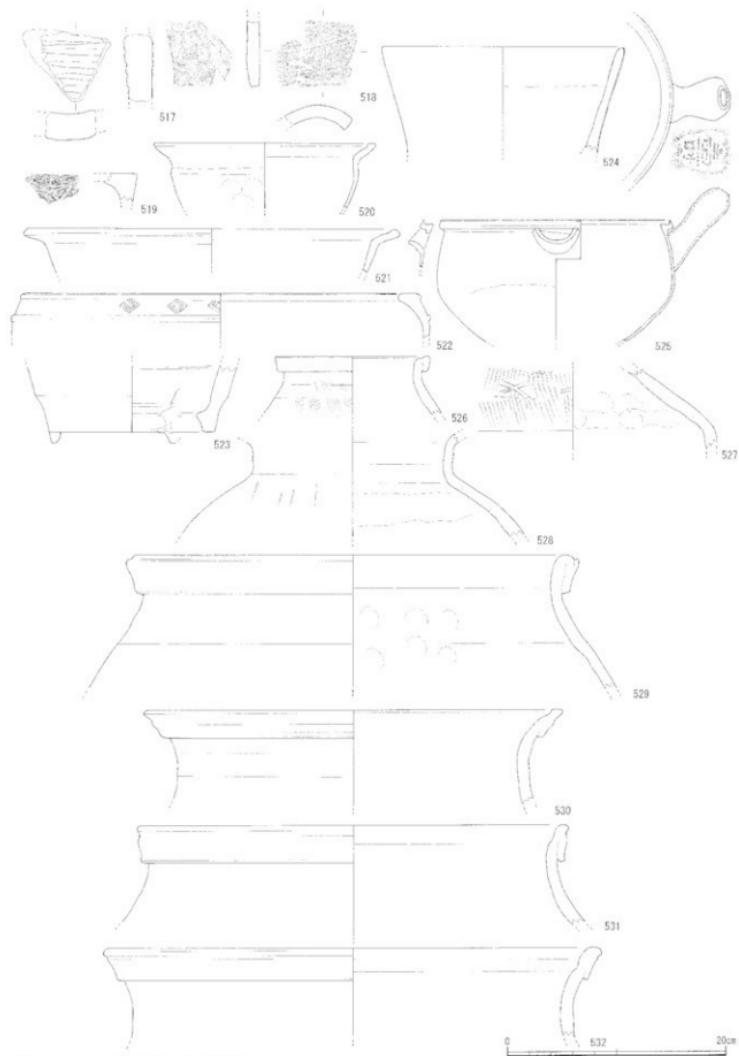
第1-9図 清水北遺跡 出土遺物④ (412は1:2、それ以外は1:4)



第I-10図 清水北遺跡出土遺物⑤ (443~451は1:2、それ以外は1:4)



第1-11図 清水北遺跡 出土遺物⑥ (1:4)



第 I - 12 図 清水北遺跡 出土遺物⑦ (1 : 4)

## II 伊賀市 中友生・界外地内城館群ほか

### 1 調査の経過と遺跡の立地

安田氏館跡は、久米川右岸の伊賀市界外字北浦に所在する室町から戦国時代の館跡である。昭和61年度県営圃場整備事業（上野東部地区）に伴い発掘調査を行った。調査は昭和61年5月19日に開始し8月30日に終了した。調査面積は2,000m<sup>2</sup>である。

塚本館跡は、伊賀市界外字塚本に位置する室町から戦国時代の館跡である。同事業に伴い発掘調査を行った。調査は昭和61年7月1日に開始し、8月31日に終了した。調査面積は3,000m<sup>2</sup>である。

四ノ坪遺跡は、伊賀市上友生字四ノ坪に位置する。この遺跡も同事業に伴い発掘調査を行った。調査は昭和61年8月8日に開始し、8月15日に終了した。調査面積は480m<sup>2</sup>である。

田中氏館跡は、伊賀市中友生字森ノ下に位置する。

この遺跡は昭和62年度県営圃場整備事業（上野東部地区）に伴い発掘調査を行った。調査は昭和62年9月10日に開始し、9月18日に終了した。調査面積は300m<sup>2</sup>である。

### 2 位置と環境

安田氏館跡（A）、塚本館跡（B）、四ノ坪遺跡（C）田中氏館跡（D）は、木津川支流の久米川右岸の河岸段丘上に立地する中世の遺跡である。伊賀には室町時代から戦国時代の城館跡が多くあるが、久米川流域においても約30の城館跡が確認されている。その代表的なものとして、やや上流の曇代の百地丹波城跡（1）がある。安田氏館跡・塚本館跡の周辺にも、中切館跡（2）、西岡氏館跡（3）、山ノ井氏館跡（4）、日野氏館跡（5）、澤氏城跡（6）などがある。さらに、安田氏館跡の北の尾根上にある阿弥陀寺跡伝承地（7）は1294年の「西大寺文殊仏脳内經」、1391年の西大寺諸国末寺帳に寺名がみえる阿弥陀寺跡と考えられている。

### 3 安田氏館跡

#### （1）調査前の状況

調査前には、北側および東側の土塁が良好に残っていた。土塁の高さは最も高い北東隅部分で、2.5mある。土塁の外側（北側・東側）には堀の痕跡と

思われる水路が残る。この水路は館の西には周りこままで、まっすぐに西に流れている。館の南半部は削平が著しい。

#### （2）遺構

##### ①土塁

土塁 S A 1 館の北・東側の土塁。長さは北側で38m、東側で24mある。北東隅が最も高く、土塁幅も広い。北側土塁は、西に行くにしたがって低くなり、幅も狭くなる。最も西で南に折れている。北側土塁の中央部付近に鞍部があるが、これが虎口になるかどうかは不明である。東側土塁は比較的幅が広いままで南に延びていた可能性が高い。土塁内側に区画溝 S D 5 が巡る。

##### ②堀

堀 S D 2 館の北側の堀。長さは47m以上、最大幅は5mある。調査前測量で確認できたように、館の西に周りこままで、まっすぐに流れている。

堀 S D 3 館の西側の堀。長さは22m、最大幅は2mある。S D 2 とは接続しない。

堀 S D 4 館の東側の堀。長さは46m以上、最大幅は5mある。南は調査区外まで延びており、堀がどこまで続くかは不明である。

##### ③館内

##### A. 建物

館内の北西部で、柱穴と思われる小穴を多数確認した。このあたりに掘立柱建物があった可能性が高い。

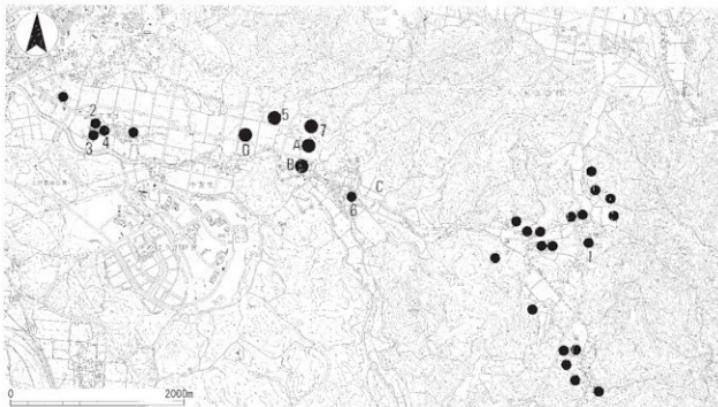
##### B. 井戸

井戸 S E 26 館の中ほどで確認した径1.3m程の石組みの井戸。深さ1.8m程の部分はテラス状になっている。深さ2.5mの部分まで掘削したが、それより下の部分は未掘である。

##### C. 石組遺構

石組遺構 S K 21 長さ3.5m、幅1m程の長方形の石組遺構。四方に数段の石積がある。方形の石組 S K 22 と繋がる。

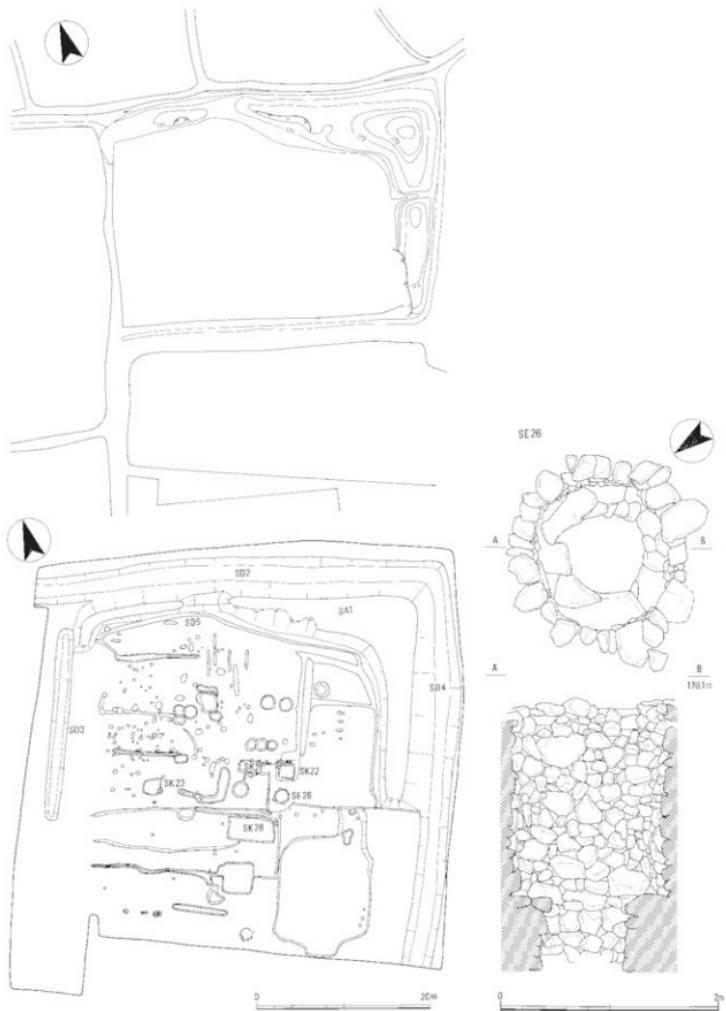
石組遺構 S K 22 長さ1.5m、幅1.3m程の長方形の石組遺構。四方に3段程の石積がある。南北方向の



第II-1図 伊賀市安生付近の城館（1：50,000）



第II-2図 安田氏館跡・塚本館跡周辺（1：5,000）



第II-3図 安田氏館跡 調査前・調査後測量図(1:500)、SE 26(1:40)

溝に繋がる。

#### D. 土坑

土坑SK23 長さ2m四方程の方形の土坑。埋土から土師器皿がまとめて出土した。  
土坑SK28 長さ5m、幅2.5m程の長方形の土坑。西側には石積がある。埋没は近世にまで下る。  
大型土坑 東西10m、南北12m程の方形の大型土坑。南北に張り出し部分がある。

#### (3) 遺物

##### ①土壘出土遺物

近世～近代陶器 1は蓋、2は灯明皿、3は小皿、4は椀、5は灯明器か、6は蓋、7は皿である。8は瀬戸美濃産の陶器火鉢で「呂宋瓶掛」と呼ばれるものである。9は天目茶碗、10は花瓶、18は信楽製品の擂鉢。4期中段階のものか。19は行平。25・26は徳利。25には「申」、「淹本」、「東天紅」、「匱升」の文字が、26には「壽」、「菅野」、「呉服川」

朝日樓 蔵元」の文字がある。

中世陶器 11・14は信楽製品の甕。11は畠中英二氏の編年の1期古段階、14は1期新段階のものと思われる。15～17は信楽製品の擂鉢。15は2期新段階、17は2期古段階のものであろう。

土師器 羽釜(12)、焙烙(13)は近世のものか。土師器皿(23・24)は土壘除去後の旧表土から出土した。

金属・石製品 銛(20)と硯(21・22)がある。21の裏面には線刻(判読不明)がある。

##### ②堀出土遺物

##### A. SD2出土遺物

27は南伊勢系の土師器皿。伊藤裕偉氏の分類の第4段階末ごろのものと思われる。

##### B. SD3出土遺物

土師器小皿(28)・皿(29)、瓦質土器の香炉(30)、信楽製品の甕(31)・甕(32・33)がある。32・33は2期古段階のものと思われる。

##### ③土坑出土遺物

34～54はSK23から出土した。皿はいずれも「京都系」の皿。16世紀代のものか。55・56は信楽製品の程鉢。いずれも2期古段階のものか。

57はSK22から出土した花崗岩製の石臼、58・59はSK28から出土した。58は瀬戸美濃製品の小甕。

59は陶器の水差。信楽製品か。いずれも近世の遺物である。

##### ④井戸出土遺物

60は石組井戸SE26から出土した。

##### ⑤柱穴出土遺物

いずれも信楽製品の擂鉢である。61はC3-Pit10から、62はG2-Pit5、63はH4-Pit2から出土した。

##### ⑦包含層出土遺物

#### A. 古代以前の遺物

64は硯。77は鉢である。88は磨製石斧。板状の石材から割り出した掠切痕が残る。側面には使用時の掠痕が、刃部には磨耗痕がある。

#### B. 中世の遺物

土師器 皿(65)、鍋(66)などがある。65の底部には凸面がある。66は南伊勢系の土師器皿。第4段階後半のものである。

瓦質土器 67は鍋。68は風がの口縁部。

信楽製品 甕(69～72)と擂鉢(73～75)がある。甕のうち69・70は1期古段階、71は1期新段階のものである。擂鉢のうち73は2期古段階、74・75は2期中段階のものと思われる。

常滑製品 76は常滑製品の無頬甕。

貿易陶磁 79は青磁の椀。底部内面に文様がある。その他 瀬戸美濃製品には四耳甕(81)、香炉(83)がある。86は軒丸瓦。周縁部の幅が狭く、巴文の尾が長い。室町期の可能性がある。87は鉛弾。時期は不明であるが、中世のものとする。89は石鍋。

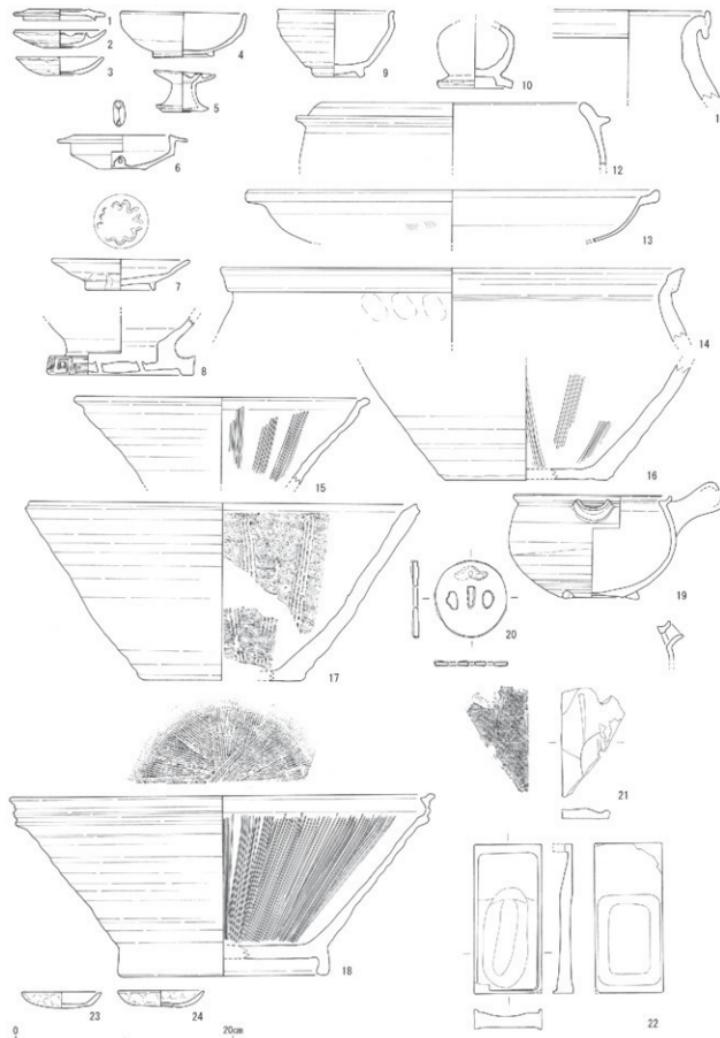
#### C. 近世から近代の遺物

78は花瓶、80は灯明器。82・84は「呂宋瓶掛」とよばれる陶器火鉢。82と84は釉調が似ており、同一個体の可能性が高い。85は「透かし」や把手の装飾など凝った削りが見られる。90は寛永通宝。91は文久承宝。

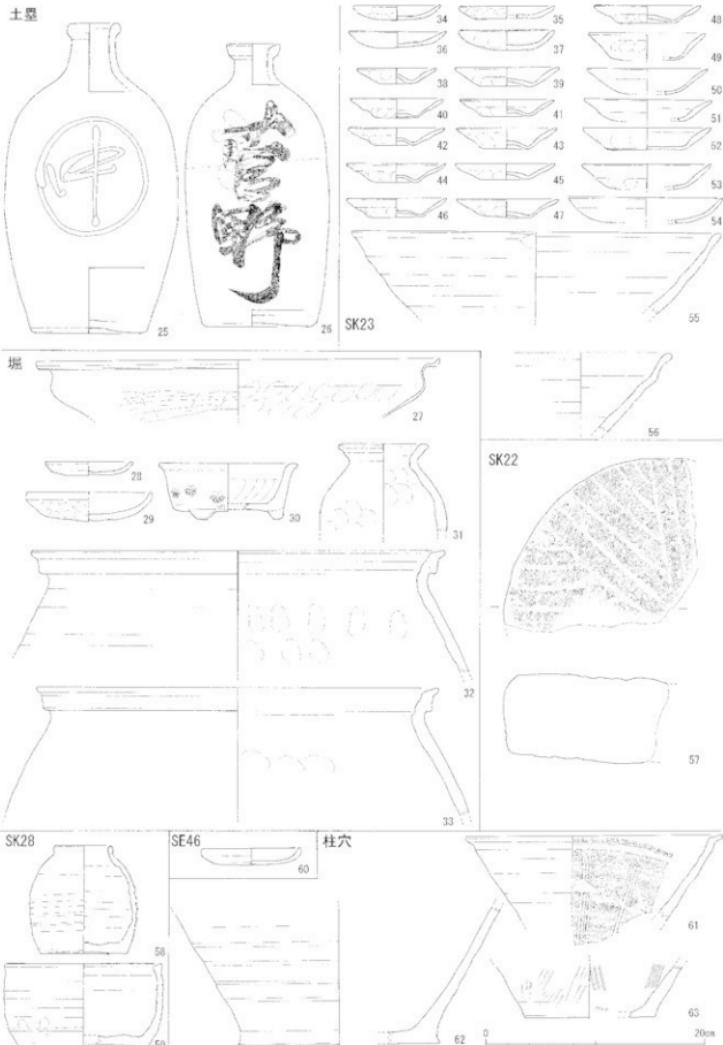
#### (4) 小結

安田氏館跡の発掘調査で出土した遺物から、館跡の成立と廃絶を見ていきたい。出土遺物のうち、信楽製品の甕は、畠中編年の1期古段階(13世紀後半～14世紀半ば)にまで遡るものもあり、やや古い傾向を示す。これに対し擂鉢は、2期古段階(15世紀後半)から安定して出土し、近世のものも出土する。

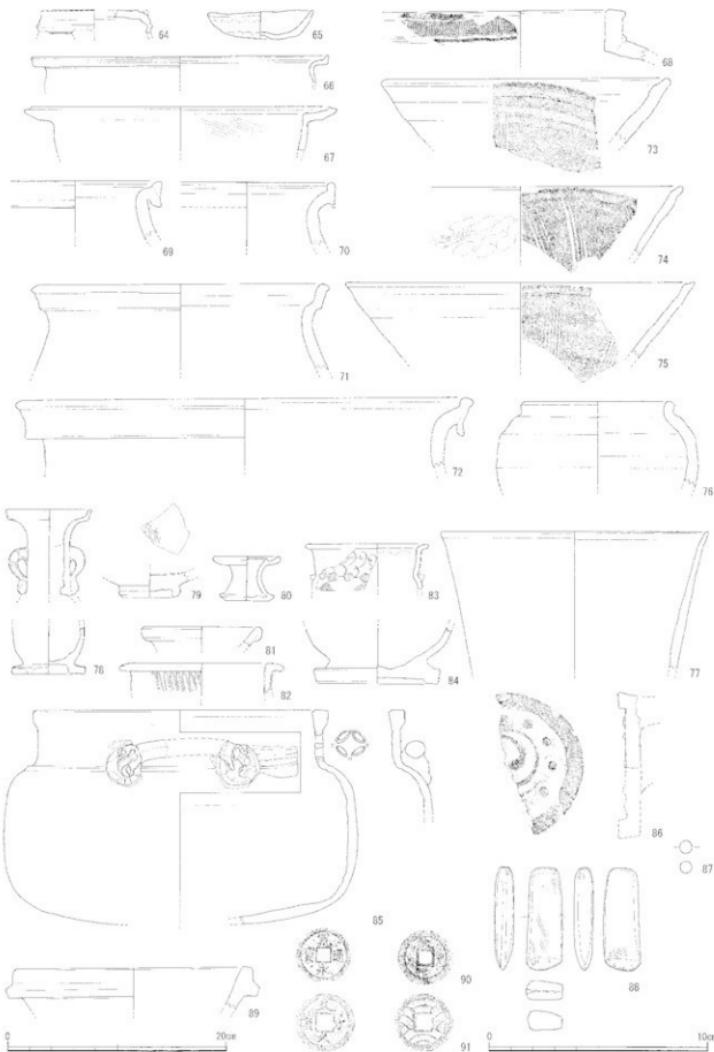
これらのことと踏まえると、調査地では13世紀



第II-4図 安田氏館跡 出土遺物① (1:4)



第II-5図 安田氏館跡 出土遺物② (1:4)



第II-6図 安田氏館跡 出土遺物③ (87・88・90・91は1:2、それ以外は1:4)

後半から14世紀半ばごろに生活が始まり、15世紀後半以降に盛期を迎える。近世・近代まで居住が続くと考えられる。ただし土塁や堀を構えた時期は、土塁下の旧表土出土の土師器皿（22・23）以降、概ね15世紀後半以降と考えられる。

土塁出土の遺物の多くは、近世の遺物である。これは近世にならぬ、土塁が崩されることなく屋敷地の外郭施設として使用され続けたことによると思われる。

## 4 塚本館跡

### （1）調査前の状況

調査前には、長さ17m、高さ3mの西土塁が残っていた。館内では、東側の水田（A・B・C）がやや高く、西側の水田（D・E・F）が低くなっている。北・西・南の堀にあたる部分（G・H・I・J、調査後遺構番号S D 3）は館内より1～1.5mほど低くなっている。

### （2）遺構

館の周囲を巡る堀、土塁、館の建物になると思われる柱穴・土坑などを確認した。ただし、館内西側の部分（調査前測量図D・E・F）は、削平を受け、この部分には、館の遺構は残存していないかった。

#### ①土塁

調査前測量でも確認できていた土塁。外側に堀（S D 3）、内側に区画溝（S D 4）が巡る。基底部の幅は6.5～8m、基盤層からの盛土高は2.6mである。残存はしていないが、堀S D 3と溝S D 4の間が土塁で、館の西辺と北辺を巡っていたと考えられる。館の南辺については、S D 3とS D 4の間が狭くなつており、土塁の幅は3m程度であったと思われる。

#### ②堀

堀S D 3 館の南・西・北を巡る堀。堀の長さは南側で38m、西側で59m、北側で36m以上、堀幅は南側で5m、西側で5.8～6m、北側で5.5m、深さは西側で1.3m、北側で2mである。館の南辺で途切れる部分があり、ここが虎口になる可能性が高い。

#### ③溝

溝S D 4 館西側と北側の土塁の内側を巡る溝。長さは西側で37m、北側で19m、幅は西側で3m、北側で2m、深さは北側で70cmである。北辺で途

切れる部分がある。

溝S D 5 館の内部で確認した「L字」状に折れる溝。長さは東側で14.5m、北側で15m以上である。北側ではさらに西に延び、S D 4に接続する可能性がある。館の内部を区画するための溝と考えられる。

#### ④館内

##### A. 建物

調査区の東部で多数の柱穴を検出した。掘立柱建物が複数存在する可能性が高い。

##### B. 構

調査区の東部で2つの構（S A 8・9）を検出した。S A 8は長さ3mの2間、S A 9は長さ9mの4間である。

##### C. 井戸

調査区の東端で検出した石組の井戸。土師器鍋・つるべが出土した。

##### D. 土坑

柱穴群の東部で円形の土坑（S K 6・7）を検出した。

##### E. 石垣

調査区の北部で検出した石垣。長さ7.7mが残る。基底部にやや大きめの川原石を置き、その上に小ぶりの川原石を3～4段積み上げる。石の積み方は短辺を表に出した、いわゆる「小口積み」である。裏込めの栗石はみられない。

#### ⑤館廃絶後の遺構

土坑群 調査区の西部の削平を受けた部分で土坑が集中してみられた。性格は不明。

### （3）遺物

#### ①土壘盛土出土遺物

土壘盛土から出土した遺物は少ない。図示したものは瓦質土器（1）1点のみである。体部には線刻による文様が施される。

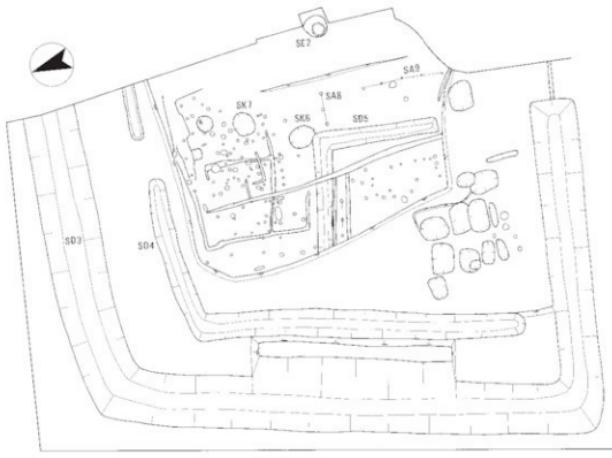
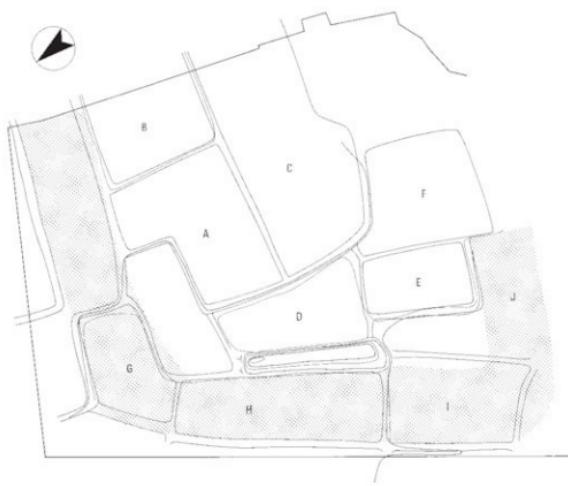
#### ②堀・溝出土遺物

##### A. S D 3出土遺物

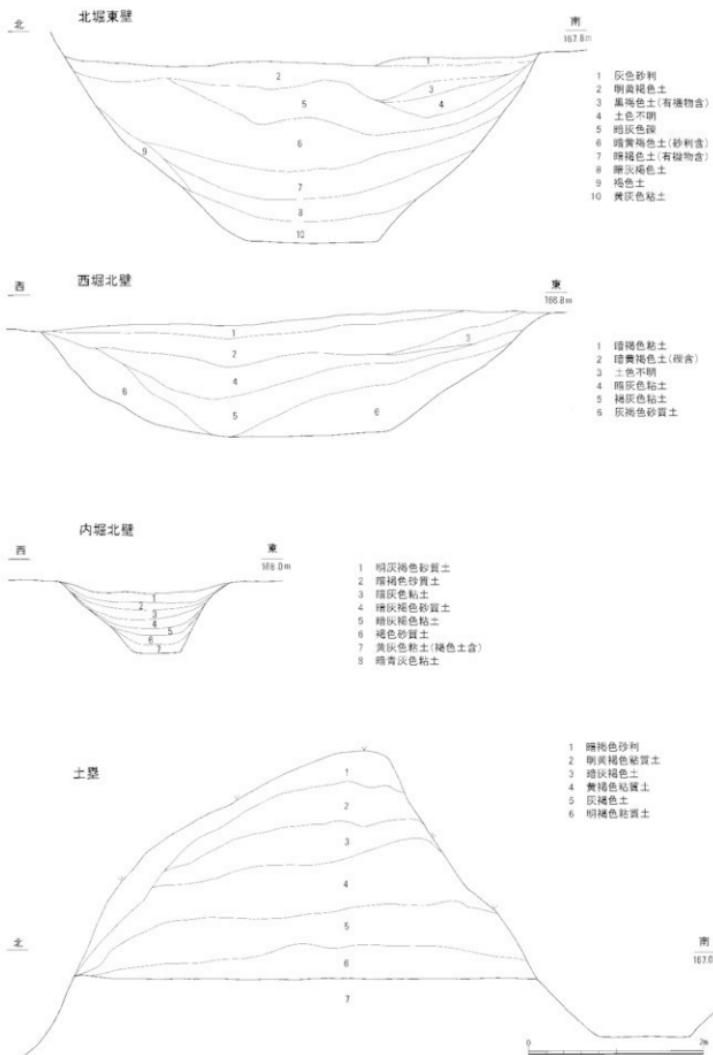
ほとんどが近世以降の遺物である。5は花瓶。中世のものには、信楽製品の搖鉢（7・8）と甕（9）がある。7・8は2期中段階、9は2期古段階のものと思われる。

##### B. S D 4出土遺物

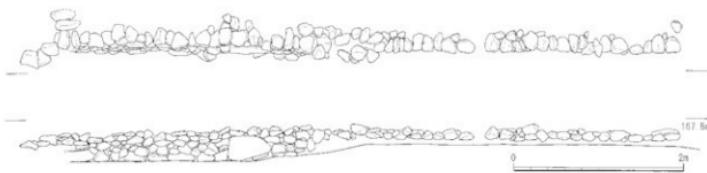
近世以降の陶器（10・16・17）が多く含まれる。



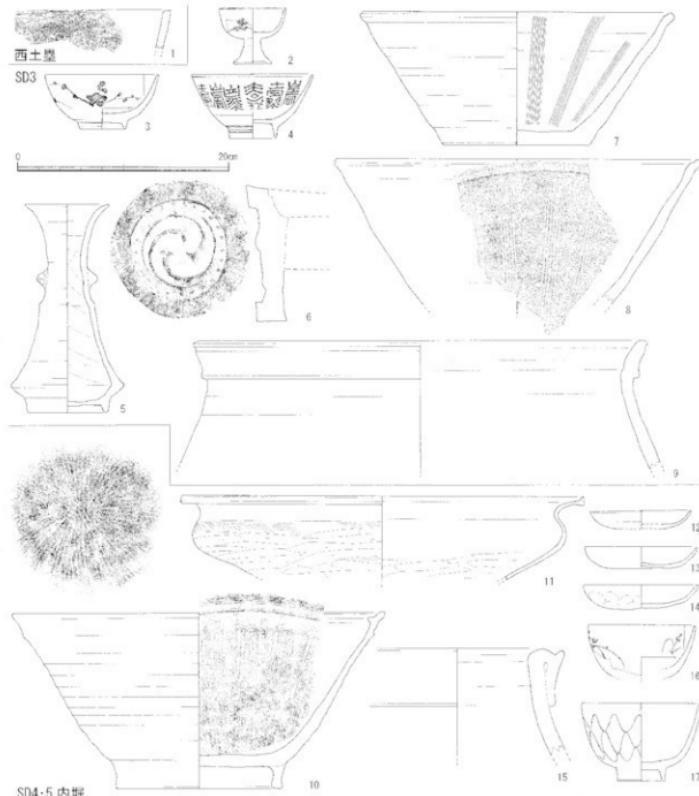
第II-7図 塚本館跡 調査前・調査後測量図 (1:500)



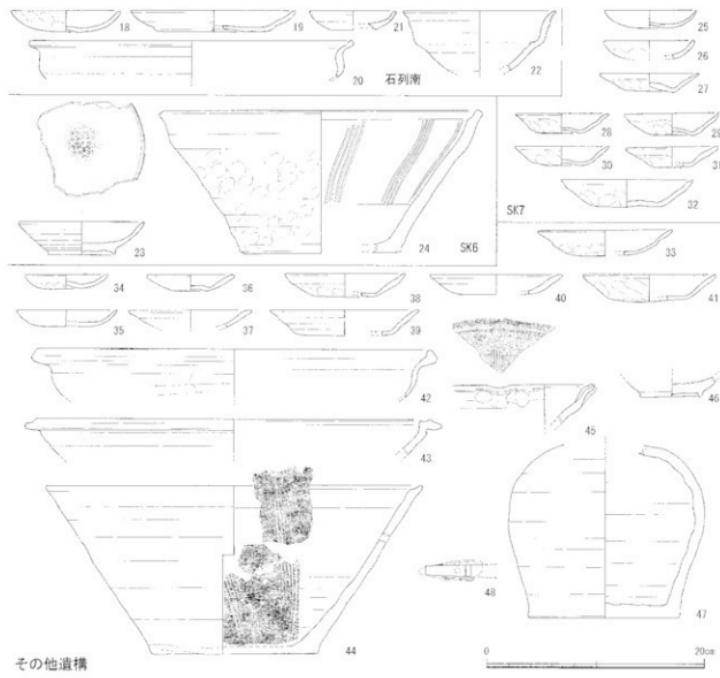
第II-8図 塚本館跡 堀・土塁断面図 (1 : 50)



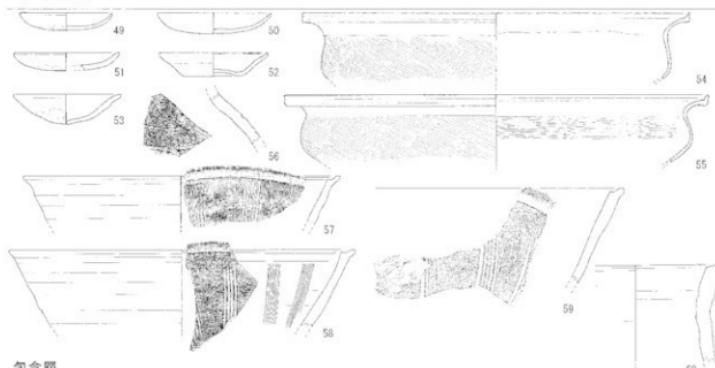
第II-9図 塚本館跡 石垣 (1:50)



第II-10図 塚本館跡 出土遺物① (1:4)

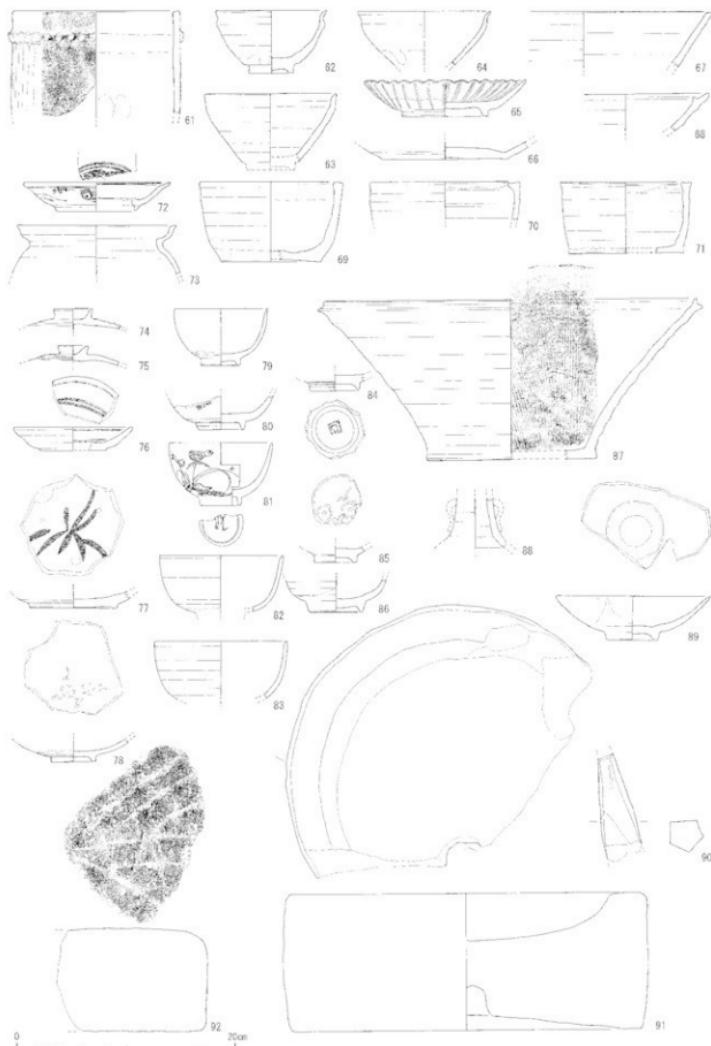


その他遺構



包含層

第II-11図 塚本館跡 出土遺物② (1:4)



第II-12図 塚本館跡出土遺物③ (1:4)

10は4期古段階の擂鉢。中世の遺物には土師器皿（12～14）、常滑製品の甕（15）がある。15は9型式の甕である。

#### C. SD 5出土遺物

この遺構からの出土遺物にも、近世のものが含まれる。図示した11は第4段階dかf型式の鍋。

#### ③石列付近出土遺物

石列の南側で出土した遺物群。土師器皿のうち、18の底部内面には凸部がある。19はやや大型の皿。南伊勢系D系統の皿に似るが、器壁や胎土が異なる。20は近世の土師器熔炉。21は瀬戸美濃製品の灰釉丸皿。22は瀬戸美濃製品の天目茶碗。

#### ④土坑出土遺物

23・24はSK 6から出土した。23は瀬戸美濃製品の灰釉丸皿。大窯第2段階のものと思われる。24は信楽製品の擂鉢。2期古段階のものと思われる。

25～32はSK 7から出土した。26を除き、いわゆる「京都系」土師器皿の影響を受けたものである。

#### ⑤その他遺構出土遺物

土師器 皿（33～41）には「京都系」の影響を受けたものが多いが、33は明らかに異系統である。42は近世の熔炉である。

陶器 43は瀬戸美濃製品の折縁深皿。古瀬戸後Ⅱ期のものである。44・45は信楽製品の擂鉢。2期古段階のものである。46は瀬戸美濃製品の灰釉丸皿。47は信楽製品の甕。頸部が打ち欠かれている。

金属製品 48は刀子。

#### ⑥包含層出土遺物

土師器 皿（49～53）には様々な系統のものがある。52は「京都系」の影響を受ける。鍋（54・55）はいずれも第4段階dかe型式のものである。信楽製品 56は甕。文様は繪垣文か。57～59は擂鉢。57・59は2期中段階、58は2期古段階のものと思われる。60は甕。

瓦質土器 61は口縁部下に凸帯をめぐらせ、刻目を入れる。器種は不明。

瀬戸美濃製品 62～64は天目茶碗。62は登窯期、63・64とも古瀬戸後期のものと思われる。65は登窯期の菊皿、66～68は古瀬戸後期の盤類、67は後Ⅱ期の直線大皿、68は後Ⅳ期新段階の卸目付大皿。69～71は筒形の鉢。いずれも近世のもの。69・

71は長石釉が、70は鉄釉が外面に施される。貿易陶磁 72は青花の端反皿。明代のものである。

その他陶器 73～89は近世以降の陶器である。74・75は蓋、76・77・78は瀬戸美濃製品の長石釉の皿。内面に鉄絵が施される。82・83・86は瀬戸美濃製品の灰釉椀。87は信楽製品の擂鉢、3期新段階のものと思われる。88は花瓶。89は肥前焼の青緑釉の皿。

石製品 90は砥石、91・92は石臼である。91の石材は凝灰岩、92の石材は花崗岩である。

#### （4）小結

塙本館跡でも安田氏館跡と同様に、館の成立と変遷を見ていきたい。出土遺物のうち、信楽製品は畠中編年の2期古段階（15世紀後半）以降、常滑製品は9型式（15世紀前半）、瀬戸美濃製品は古瀬戸後Ⅱ期（14世紀末～15世紀前葉）、土師器鍋が第4段階d型式（16世紀後半）以降のものが出土している。このことから、館の成立は15世紀代であることが推測される。

また、安田氏館跡と同じく、近世以降の遺物も多く出土している。これは近世においても、館が使用されていたことを示している。

### 5 田中氏館跡

圃場整備で水路が通る部分のみの調査を行った結果、径20～30cmの柱穴数基と・溝を確認した。これらの柱穴は掘立柱建物を構成するものである可能性が高い。館との関連は不明である。

#### 6 四ノ坪遺跡

##### （1）遺構

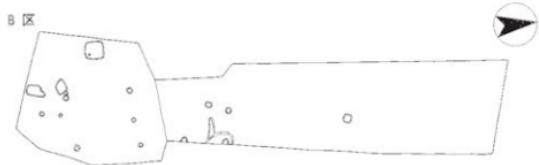
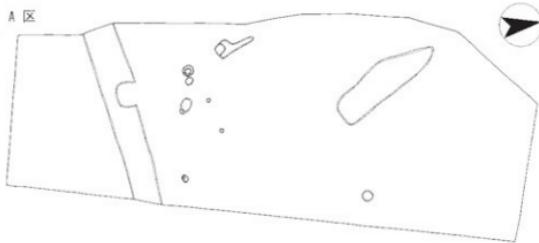
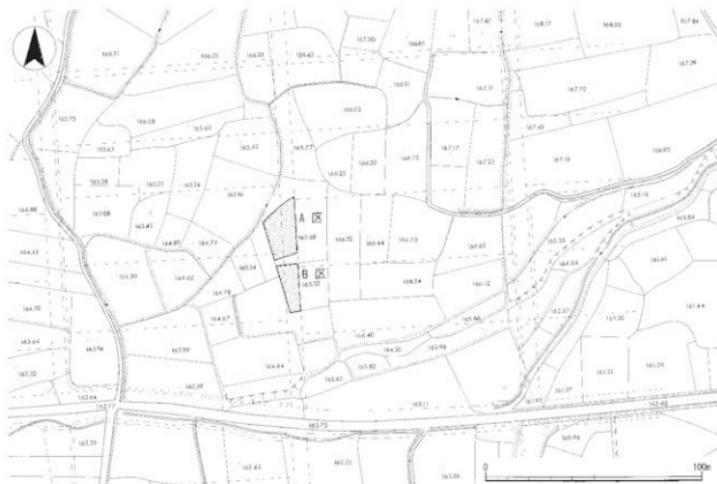
土坑7基（SK 2・4・5・6・7・8・9）、石組井戸1基（SE 10）、溝2条（SD 1・3）を検出した。以下概略を記す。

土坑SK 2 径約2.5mの円形の土坑。深さは62cmである。埋土から瓦器（2・3）などが出土した。

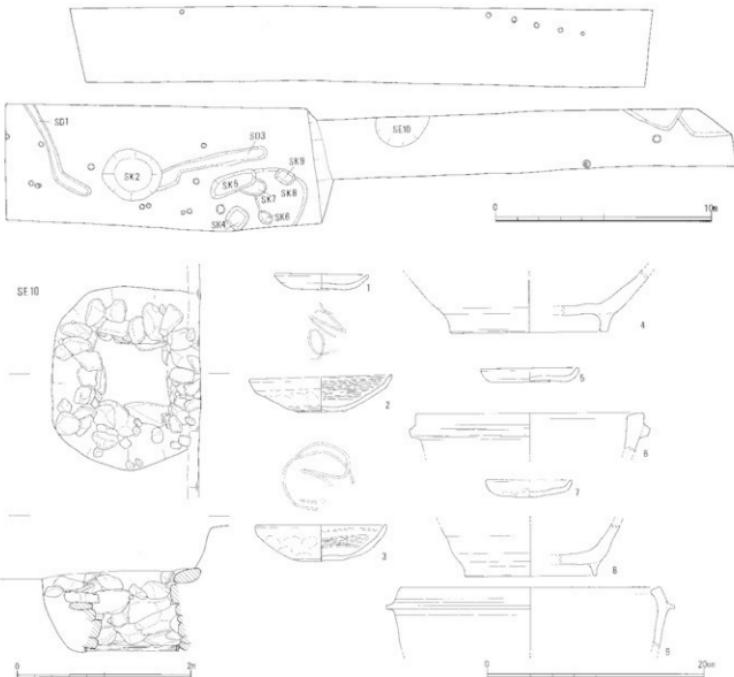
井戸SE 10 挖形径2.2mの石組井戸。深さは90cmである。底に横板を組み、その上に4段ほどの石を組む。埋土から土師器皿・石鍋が出土した。

##### （2）遺物

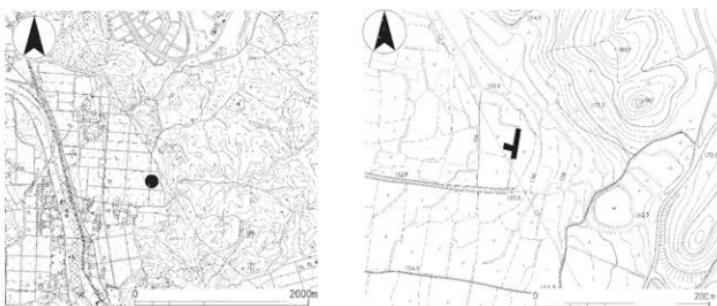
1～4はSK 2から出土した。1は土師器の小皿、2・3は瓦器の椀。2は山田猛氏の編年のⅢ段階2型式、3はⅢ段階3型式と思われる。4は陶器の練



第II-13図 田中氏館跡 調査区位置図(1:1,000)、遺構平面図(1:250)



第II-14図 四ノ坪遺跡 遺構平面図(1:200)、SE 10(1:50)、出土遺物(1:4)



第II-15図 鳥羽遺跡 位置図(1:50,000)、調査区位置図(1:5,000)

鉢。5・6はS E 10から出土した。5は土師器の皿、6は石鋸。7～9は包含層から出土した。

## 7 烏羽遺跡

以上のほか、昭和62年度県営圃場整備事業（上野南部第二地区）にかかり、伊賀市沖の烏羽遺跡で発掘調査を行った。発掘調査は昭和62年7月2日から17日に行った。調査面積は310m<sup>2</sup>である。

調査の結果、ごく少量の土師器片・製塙土器片が出土したもの、遺構は確認できなかった。（竹田）

### 【参考文献】

- ※遺跡周辺の城館跡、寺跡については、『三重県上野市遺跡地図』（上野市教育委員会1992年）による。
- ※各遺物の型式・編年は以下の論考による。
  - ・信楽製品＝畠中英二「信楽焼の考古学的研究」（サンライズ出版 2003年）
  - ・常滑製品＝中野晴久「生産地における編年について」（『常滑焼と中世社会』小学館 1995年）
  - ・中世瀬戸美濃製品＝藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 1997年）
  - ・近世瀬戸美濃製品＝井上直久男「伊賀地方出土の中・近世陶磁について」（『菊水氏城跡発掘調査報告』山町教育委員会 1987年）
  - ・南伊勢系の土師器鍋＝伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.1 1990年）
  - ・南伊勢系の土師器皿＝伊藤裕偉「土師器皿類の変遷」（『北高氏館跡9』美村村教育委員会 2005年）
  - ・瓦器＝山田豊「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究II』1986年）

### III 名張市中村 浦遺跡

#### 1 調査の経過と遺跡の立地

浦遺跡は、名張市中村字浦・黒石に所在する遺跡である。昭和60年度県営圃場整備事業に伴い発掘調査を行った。調査は昭和60年5月1日に開始し6月7日に終了した。調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。発掘調査区の東隣には、「日本書紀」にみえる「隱駕家」の推定地とされる黒石遺跡がある。地形から、今回の発掘調査区は黒石遺跡と一連のものと考えられる。

#### 2 位置と環境

浦遺跡（A）は、名張川上流の宇陀川右岸の河岸段丘上に立地する弥生時代から中世の遺跡である。浦遺跡内に遺構がみられるようになるのは弥生時代の中期からである<sup>10</sup>。この時期には堅穴住居などが多数確認された夏見下川原遺跡（1）がある。

古代では、近辺を畿内から伊勢に向う交通路が通過する。遺跡周辺は伊賀国名張郡夏見郷に含まれ、銀音寺遺跡（2）、黒石遺跡（3）、鴻ノ巣遺跡（4）などで良好な掘立柱建物群が確認され、黒石遺跡と浦遺跡の付近には駄家の存在も想定されている<sup>11</sup>。また、夏見庵寺跡（5）では、7世紀末～10世紀の寺が運営されている。

中世になると、周辺には多くの城館が造られる。浦遺跡に隣接する中野八郎宅跡（8）は、通称「城



第三-1図 浦遺跡 位置図（1：50,000）

山」と呼ばれ、堀の痕跡ではないかとされる水田が残る。なお宇陀川流域は中世には東大寺領黒田庄であり、莊園関連の文書が多数現存している。

#### 3 遺構

##### （1）弥生時代中期の遺構

土坑SK17 長2.2m×1.4mの長方形の土坑。埋土は粘質の褐色土である。土坑の北西端ではほぼ完形の弥生土器壺が出土した。

土坑SK19 長軸3.3m、短軸2mの楕円形の土坑。埋土から弥生土器壺・甕などが出土した。

溝SD20 長さ7.2m、幅1.7mの溝。埋土から弥生土器壺が出土した。方形周溝墓の一部かもしない。

##### （2）古墳時代後期の遺構

土坑SK22 径1m程の円形の土坑。埋土から土師器台付甕、須恵器杯身が出土した。

##### （3）奈良時代の遺構

堅穴住居SH7 5.1m×4.6mの堅穴住居。北辺中央付近に竈痕跡の焼土がある。埋土から土師器皿・甕・甕、須恵器杯が出土した。

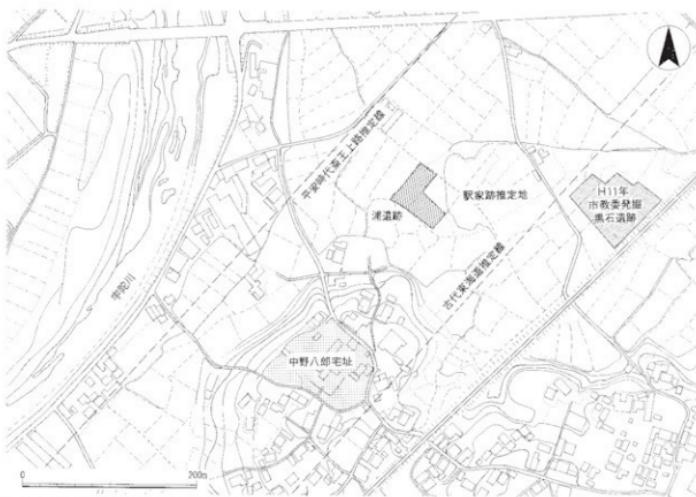
堅穴住居SH8 4.4m×4.2mの堅穴住居。北辺中央付近に竈痕跡の焼土がある。SH7、9、10と重複するが、両者の前後関係は、調査記録によるとSH7→8、SH9→10→8となる。埋土から土師器皿・甕・須恵器蓋が出土した。

堅穴住居SH9 重複するSH8、SH10に壊され、北西側しか残っていない。

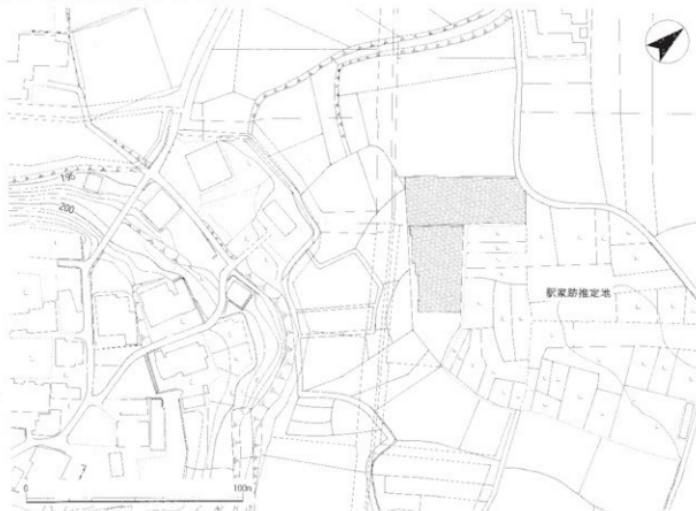
堅穴住居SH10 5.2m×4.3mの堅穴住居。SH8、9との前後関係は前述のとおり、SH11との前後関係は調査記録によるとSH10→11となる。埋土から土師器皿・甕、須恵器杯が出土した。

堅穴住居SH11 重複するSH12に壊され北辺しか残っていない。一边3.6m程の方形であると思われる。調査記録によるとSH12との前後関係はSH11→12となる。

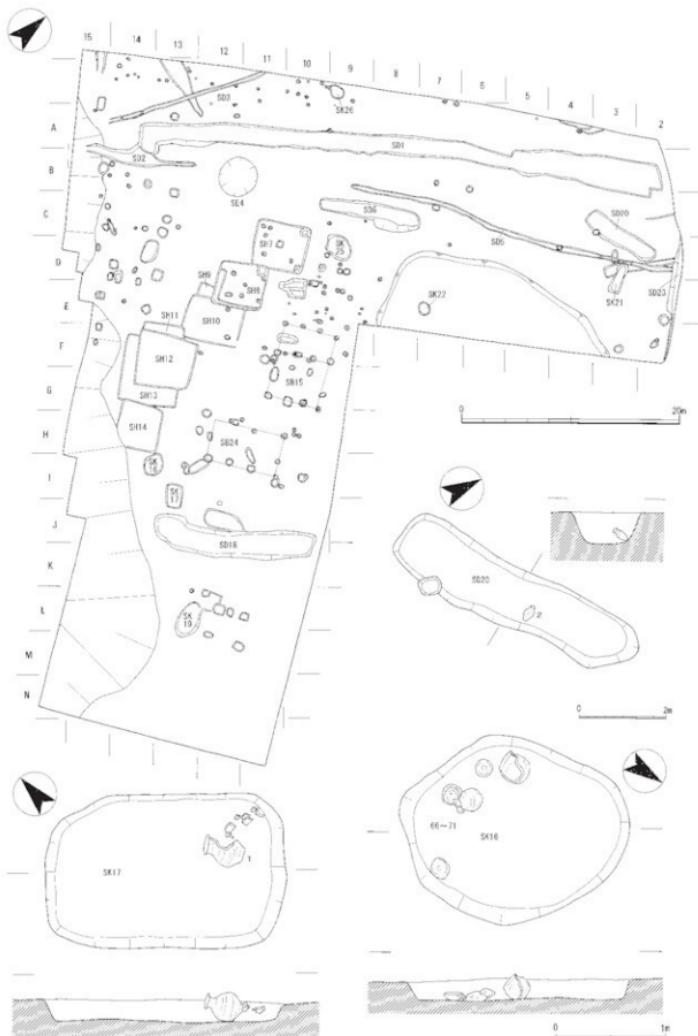
堅穴住居SH12 4.9m×3.7mの堅穴住居。SH11との前後関係は前述のとおり、SH13との前後関係は調査記録によるとSH13→12となる。埋土から土師器皿・甕、須恵器杯が出土した。



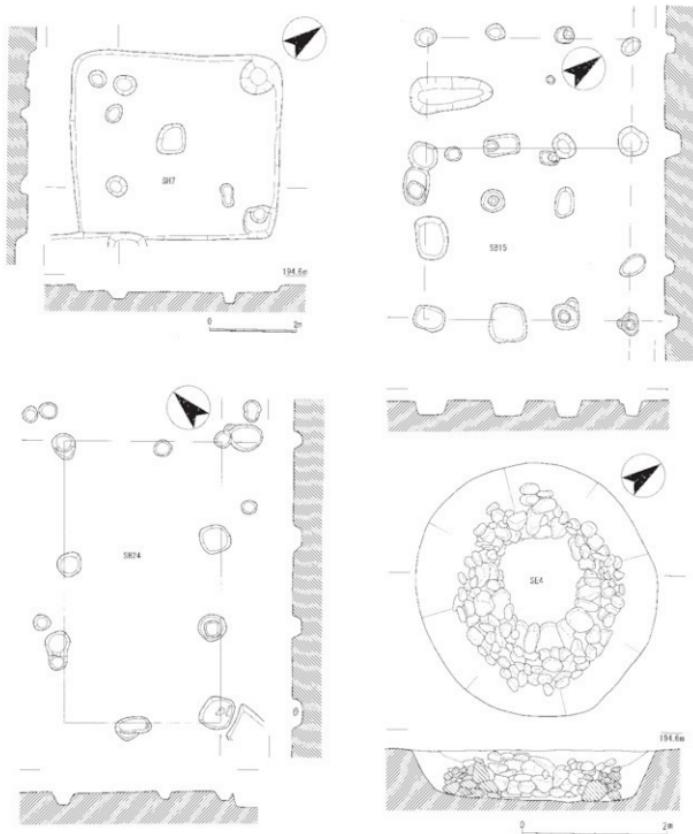
第三-2図 浦遺跡 地形図（1：5,000）



第三-3図 浦遺跡 調査区位置図（1：2,000）



第III-4図 浦遺跡 遺構平面図 (1:400)、SK 16・17・SD 20 (1:40)



第三-5図 浦遺跡 SH7・SB15・24 (1:100)、SE4 (1:60)

豊穴住居 S H13 一辺 5m の豊穴住居。S H12、14との前後関係は調査記録によると S H14→13→12となる。

豊穴住居 S H14 5.1m×4.6m の豊穴住居。S H13との前後関係は前述のとおりである。

掘立柱建物 S B15 3間×3間の建物。柱穴からの出土遺物は不明であるが、柱穴が大きく方形のものが多いので、一応古代の建物とした。

掘立柱建物 S B24 3間×2間の側柱の建物。柱穴からの出土遺物は不明であるが、柱穴が大ぶりであり、S B15とほぼ同じ方位であるので、一応古代の建物とした。

この他、調査区西端（B13～E15区付近）で、大型で方形の柱穴数基を確認している。このあたりにも古代の掘立柱建物が存在した可能性もある。

土坑 S K25 長軸2.5m、短軸1.9mの楕円形の土坑。埋土から土師器甕、杯などが出土した。

### （3）平安時代の遺構

土坑 S K16 長軸2.1m、短軸1.7mの楕円形の土坑。埋土から土師器甕、甕、黑色土器甕・椀が出土した。

### （4）中世の遺構

溝数条（S D 1・2・18・23）と石組井戸（S E 4）を確認した。特に S D 1、18、23は居館を囲む溝である可能性がある。

溝 S D 1 長さ48m、幅1.5m程の溝。概ね現在の地割に沿う。西端（A13・14区）付近でわずかに南東に折れる。埋土から土師器皿、羽釜、瓦器椀、青磁皿が出土した。

溝 S D 2 長さ10m、幅50cm程の溝。S D 1よりも古い。埋土から瓦器椀が出土した。

溝 S D 6 長さ 9 m、幅1.5m程の溝。埋土から土師器皿、瓦器椀、陶器片口鉢が出土した。

溝 S D 18 長さ15m、幅2m程の溝。概ね S D 1と平行する。西端（J 13区）付近でわずかに北西に折れる。埋土から土師器皿、瓦器椀が出土した。溝 S D 23 調査区北西端でわずかに検出した溝。出土遺物はないが、S D 1、18と直行するため中世の溝とした。

井戸 S E 4 掘方径3.5m、深さ70cmの石組の井戸。石組内部の径は1.2m程である。埋土から土師器皿、瓦器椀、青磁が出土した。

（竹田）

## 4 出土遺物

出土遺物（第6～9図）を時期別に概観する。出土遺構他については図版に付加した。

### （1）弥生時代

1～19は弥生土器。広口甕・太頸甕・無頸甕・高杯・甕・蓋などがある。概ね中期後葉に相当すると考えられる。1・2の梯描文は複合ではない。S K19出土の一組（3～16）は、当該期の資料として良好である。

### （2）古墳時代

20～28は古墳時代後期の土器類。土師器では小形鉢・高杯・台付甕があり、須恵器では杯身・甕がある。5世紀末から6世紀前半頃のものと考えられる。

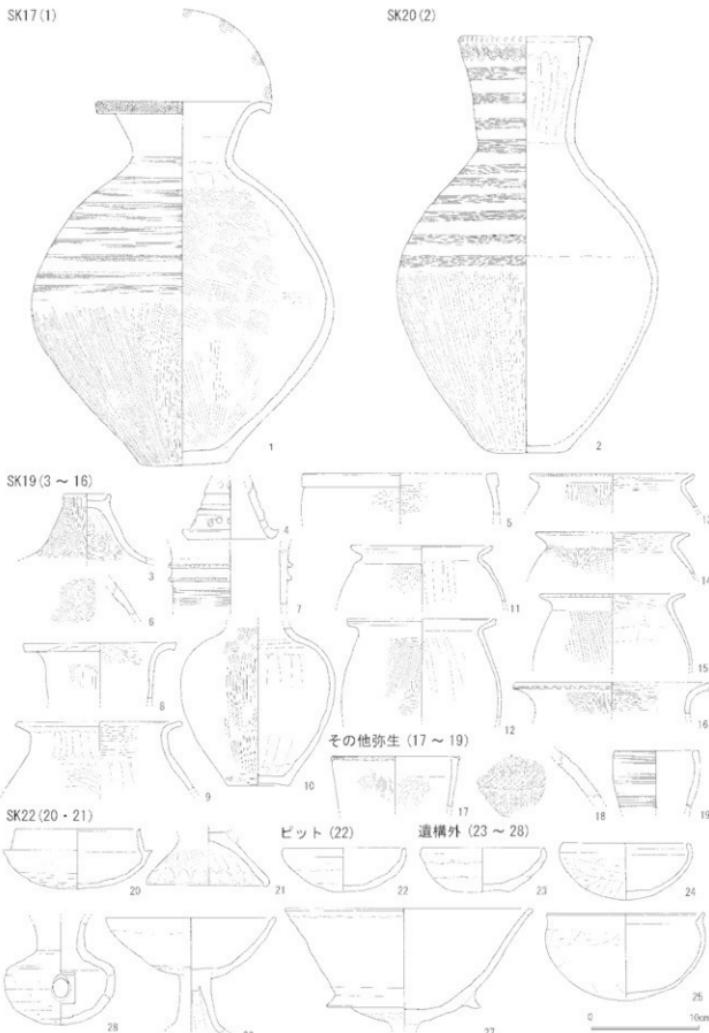
### （3）奈良・平安時代

29～65は奈良時代の土器類。豊穴住居出土の遺物は、都城における編年（以下、「都城編年」）<sup>16</sup>の平城Iから同IIにかけてのものが中心である。掘立柱建物を構成すると考えられるピット出土遺物は平城IIから同IIIにかけてのものが見られる。当遺跡出土の暗土師器（38・41・46など）は素地が緻密で調整も丁寧である。土師器甕類<sup>17</sup>には、いわゆる「近江型」（31）のほかにもいくつかの形態がある。須恵器では、杯類のほか、円面碗（61）がある。

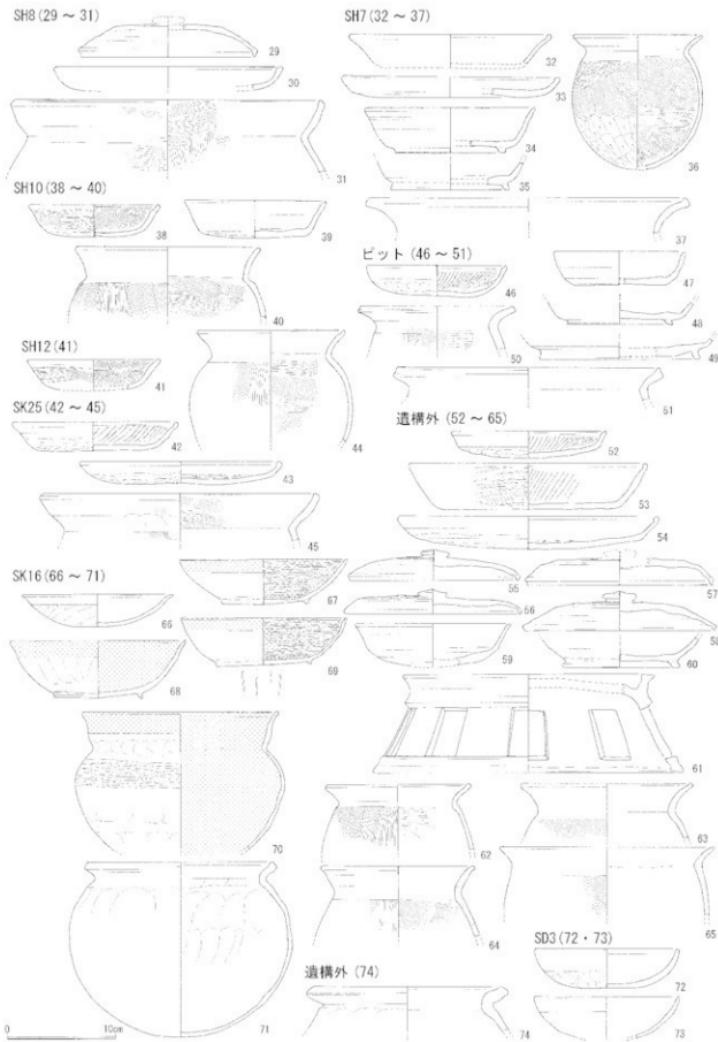
66～71は平安時代の土器類。いずれも S K16からまとめて出土した。土師器甕・甕、黒色土器椀がある。黒色土器は、内面と口縁部外面の一一部のみ黒化している類である。都城編年の平安II期（中）に併行し、9世紀後半頃に相当する。

### （4）平安時代末から鎌倉時代

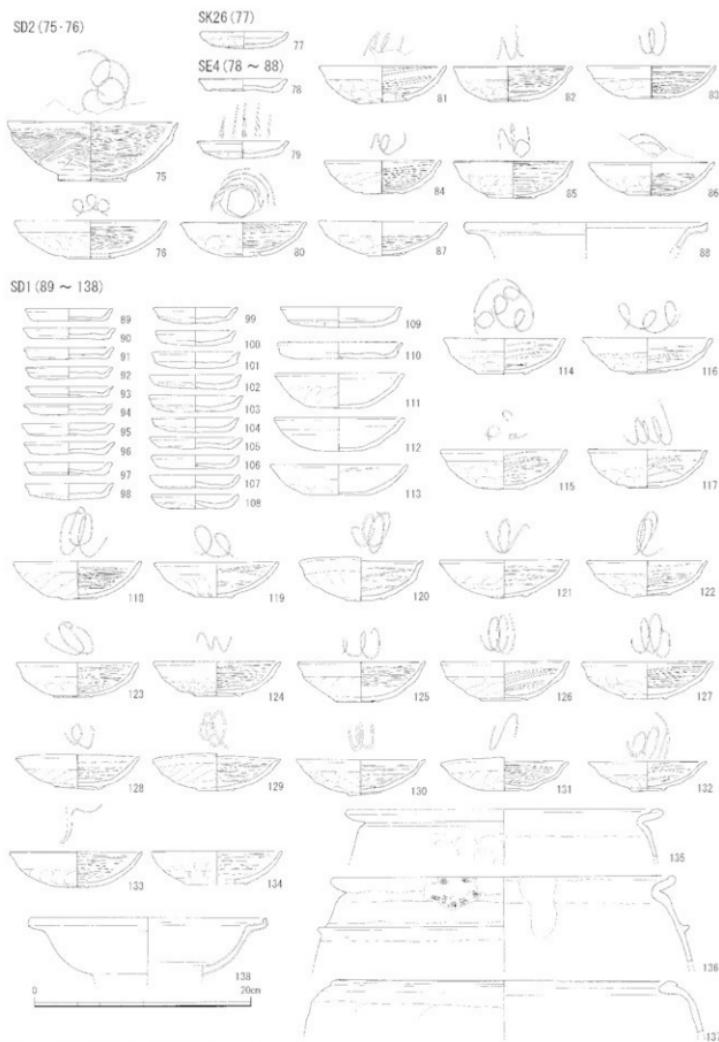
74・75・77は、平安時代末頃、76は鎌倉時代前半、78～193は鎌倉時代後半のものである。鎌倉時代後半に相当する S E 4・S D 1・S D 6・S D 18出土土器は、それれまとまった資料である。土師器・瓦器・陶器・磁器（青磁）がある。瓦器は、山田猛氏による編年<sup>18</sup>の第Ⅲ段階第3型式、福田典明氏による編年<sup>19</sup>の8期に相当する。口縁部径は11～12cm前後、高台は素地をナデつけた程度の簡単なもので、椀底よりも浮いた高台ですら見られるため、ほとんど機能していないと思われる。内面のヘラミガキは10～18周する程度で、暗文も「ゑ」字状の



第III-6図 浦遺跡 出土遺物① (1 : 4)

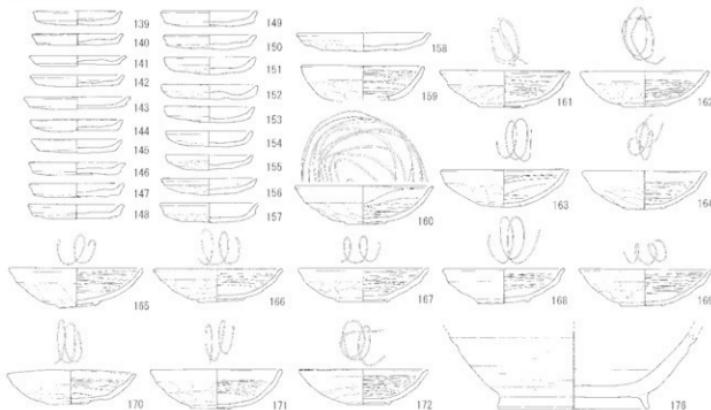


第III-4図 浦遺跡出土遺物② (1 : 4)



第三一八図 浦遺跡 出土遺物③ (1 : 4)

SD6(139～176)



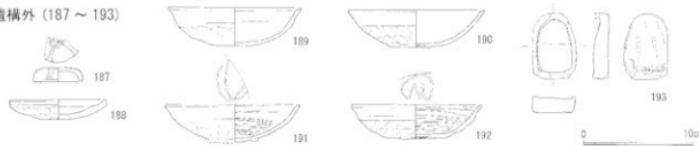
ピット(177・178)



SD18(179～186)



造構外(187～193)



第三-9図 浦遺跡 出土遺物④ (1 : 4)

簡単なものが多い。

土師器では、S D 1 出土遺物中には 3 法量が認められるが、全体に口縁部径 8 cm 程度の小皿を中心とする。小皿には、平底風で白色系を中心とした色調を呈する一群（89～98、139～150など）と、底に丸みがあり褐色系の色調を呈する一群（99～108、151～157など）の大きく 2 種類がある。前者には褐色系の色調をなすもの（141）も含まれており、都合 3 種類と見ることも可能である。作り手と志向の差と考えられる。煮沸具では羽釜があり、概ね大和型の範疇で把握できる。136 の口縁部外面には、土器の外面調整に用いたと考えられる布の圧痕がある。

青磁では、皿が 2 個体分ある（88・138）。通常、当該期の遺跡でよく見られる楕の欠落している点が少し気になる。また、遺構外ではあるが、青白磁の合子（187）もある。その他のものとして、平面梢円形を呈する石製礎（193）がある。（伊藤）

## 5まとめ

発掘調査では、弥生時代中期から鎌倉時代後半までの遺構・遺物を確認した。このうち、弥生時代中期・奈良時代・鎌倉時代には、良好な資料を得ることができた。以下、時代ごとに変遷を述べ、まとめとしたい。

弥生時代中期後葉 溝 1 条、土坑 2 基を確認した。溝のうち S D 20 は方形周溝墓の一部である可能性がある。

奈良時代 積穴住居 8 棟を確認した。このほか 2 棟ある掘立柱建物もこの時期のものと思われる。積穴住居はほぼ軸線を揃え、かなりの回数の建て替えが行われている。掘立柱建物の方位も概ね一致する。積穴住居が同一の軸線で建て替えられている例は隣接する黒石遺跡でも確認されており（8）、調査地付近で大規模かつ安定した集落が形成されていたことが確認できる。

黒石遺跡発掘調査の所見<sup>6</sup>では、浦遺跡の東に隣接する畠地が、名張駅家と想定されている。浦遺跡発掘調査区での出土遺物は、平城 I～III（7世紀末～8世紀代前半）のものが主体で『日本書紀』にみえる駅家の時期とは一致しない。ただし、調査地よりも一段高くなる東側の畠地に駅家が存在する可能

性は残る。

鎌倉時代後半 建物跡が特定できないものの、S D 1・18 は屋敷地を囲繞する施設である可能性がある。これらの溝に直行する S D 23 も同時期の溝であり、これにより 36 m × 48 m 程の規模を持つ大規模屋敷が想定できる。敷地の中には井戸（S E 4）、溝（S D 6）がある。（竹田）

### 【註】

- (1) 遺跡周辺の城館跡、寺跡については、『名張市遺跡地図』（名張市教育委員会 1983 年）、「瀬之巣遺跡・小谷遺跡・小谷遺跡」（名張市遺跡調査会 1991 年）による。
- (2) 名張市教育委員会「黒石遺跡」（2000 年）
- (3) 山田猛「夏見廃寺の研究」（2002 年）
- (4) 都城編年については、古代の土器研究会編『古代の土器 1 都城の土器集成』（1992 年）を参照した。
- (5) 笠井賀治「北伊賀地域における古代前半期の土師器甕」（『瓦衣千年』1999 年）ほか
- (6) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』II 1986 年）
- (7) 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する観察」（『中近世土器の基礎研究』XX 2006 年）
- (8) 註(2)文献による。
- (9) 註(2)文献による。

## IV 名張市赤目町 坂之上遺跡

### 1 調査の経過

坂之上遺跡は名張市赤目町大字柏原字坂之上に所在する遺跡である。県営圃場整備事業に伴い、発掘調査は昭和62年11月5日から開始し、昭和63年1月23日に終了した。調査面積は1,800m<sup>2</sup>であった。なお遺構図は、航空写真測量による。

### 2 位置と環境

坂之上遺跡（A）は名張盆地の南西部に位置し、宇陀川流域右岸の舌状に張り出した丘陵先端部に位置する。遺跡の南西に所在する辻垣内遺跡（1）では縄文早期の押型文が、北東の中戸遺跡（2）からは後期の土器が確認されており、縄文時代から生活の痕跡が認められる。弥生末から古墳時代には各地で集落が展開したとみられ、辻垣内遺跡や赤目橋遺跡（3）、城屋敷遺跡（4）などがある。また周辺には南から東にかけての丘陵部に100基以上の古墳が築造されており、丘陵南には全長約70mの前方後円墳である琴平山古墳（5）があり、後円部に立石で閉塞した古式の横穴式石室が存在する。これらの古墳は後期以降に築造されたものが多く、中期から展開してきた美旗古墳群が衰退していく段階に相当することから、この段階から当地域を闊歩していた小首長層の勢力が伸張したことが想起されよう。

### 3 遺構

調査区の基本層序 表土の下に包含層である暗茶褐色土があり、基盤となる黄橙色粘質土で検出を行っている。場所により包含層と基盤の間にもう1層入る箇所もある。

#### （1）遺構

調査で確認された遺構は弥生時代末から中世前期にかけてのものであるが、古墳時代を中心である。出土遺物には縄文土器もある。

以下、目立った遺構について触れておく。個々の遺構については遺構一覧表、および掘立柱建物一覧表を参照されたい。

##### ①古墳時代前期

古墳時代前期の主な遺構としては竪穴住居S H 23・S H 27・S H 28・S H 73、掘立柱建物はS B

81・S B 83・S B 93・S B 100、柵にはS A 87がある。

竪穴住居S H 27からS H 23を経てS H 28に続く排水溝を確認した。また、S H 23は一辺7mを超える大きなものである。

Z・A 10グリッドで確認された竪穴住居S H 73は長軸7.1m、短軸7.0mで、主柱穴は5箇所あり、平面も五角形を呈する竪穴住居である。整理箱15箱に及ぶ大量の土器が出土しており、廃棄された土器群であろう。また、柱穴からは鉄製品が出土しており、ヤリガンナ・薄手の鐵板片が出土していることは注意される。また、南東隅のピットからは長頭壺が出土している。

また、掘立柱建物S B 81は独立棟持柱をもつ2間×3間の掘立柱建物である。規模は梁間3.5m×桁行5.5mと比較的大きい。

掘立柱建物の時期については不明のものがあるが、方位から考えると独立棟持柱をもつS B 82、S B 93・S B 100も同様の時期であった可能性がある。

##### ②古墳時代後期

後期の主な遺構は竪穴住居S H 11・S H 13・S H 26がある。掘立柱建物はS B 84・S B 89・S B 99・S B 101が、土坑はS K 47・S K 49がある。

S H 13の壁周溝は西側で一部2重に確認されており、建て替えが行なわれた可能性がある。南東隅から排水溝が伸び、竪穴住居S B 11に接続する。

掘立柱建物S B 84は独立棟持柱をもつものである。方位よりS B 100も同様の時期と考えられる。S B 89は3間×5間で、建物の一部の周囲には、柵SA 90を作う。規模は梁間5.6m×桁行6.7mと大きなものである。S K 47は長軸6.0m、短軸3.0mの長方形の土坑である。深さは0.1mと浅い土坑であるが比較的大きなピットが2箇所確認されており、方位も一致するS B 89との関連が注意される。

F 24グリッドPit22からは鉄製品の鋸が出土している。

##### ③中世前期

掘立柱建物を1棟確認している。3×4間の南東隅土坑をもつ。土坑からは古墳時代の遺物が混入す



第IV-1図 坂之上遺跡 位置図 (1:50,000)



第IV-2図 坂之上遺跡 調査区位置図 (1:2,000)



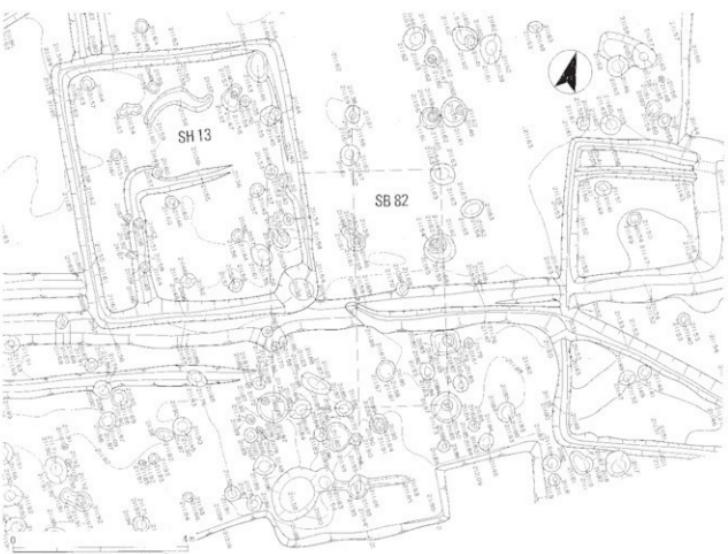
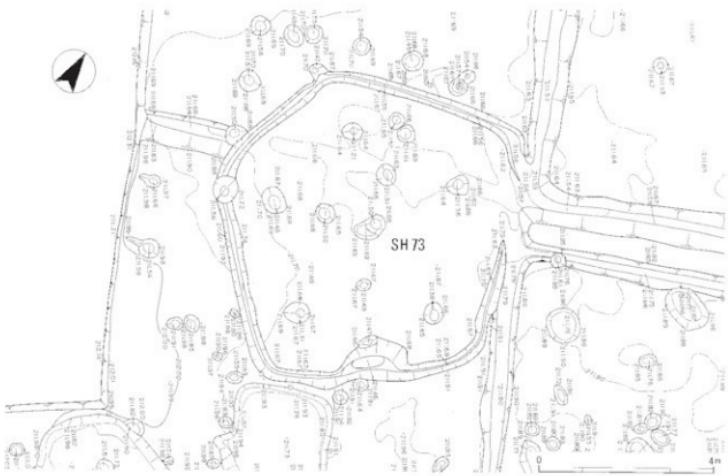
第IV-3図 坂之上遺跡 地形図 (1:5,000)



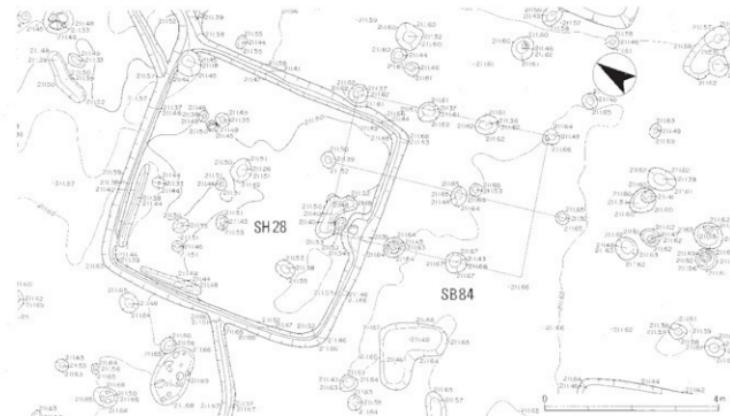
第IV-4図 坂之上遺跡 遺構平面図① (1 : 200)



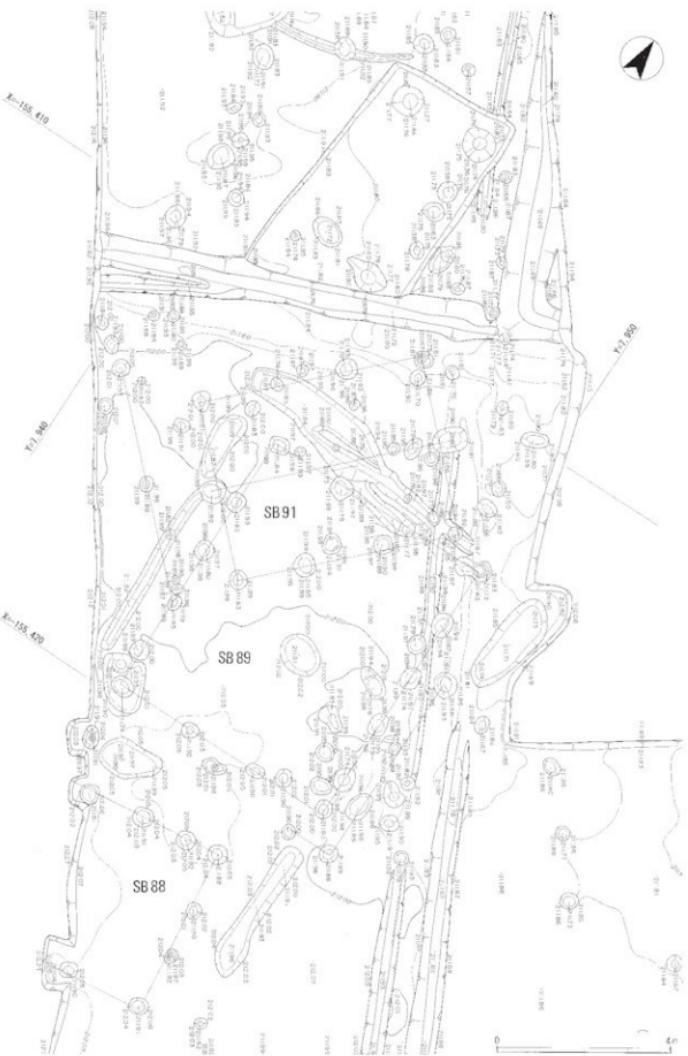
第IV-5図 坂之上遺跡 遺構平面図② (1 : 200)



第IV-6図 坂之上遺跡 SH 73・13・SB 82 (1 : 100)



第IV-7図 板之上遺跡 SB 81・SH 28・SB 84 (1 : 100)



第IV-8図 坂之上遺跡 SB 91・89・88 (1 : 100)

遺構番号		性格	時期	グリッド	調査時 遺構名	特徴・形状・計測数値など
SH	1	竪穴住居	古墳前期～後期	B～D23・24	SB1	方形。東西5.8m×南北？壁周溝のみ。
SF	2	焼土		D23	SF2	
欠番	3				SD3	竪穴住居SH1の壁周溝につき抹消。
SD	4	溝	古墳前期～後期	F・G24	SD4	小規模
SK	5	土坑	不明	F24	SK5	
欠番	6			F24	SK6	SB2の柱穴につき抹消。
欠番	7		遺物なし	G24	SD7	小規模溝につき抹消。
欠番	8			F20	SK8	SD24(SH27排水溝)の先端部につき抹消
欠番	9		遺物なし	H24	SD9	SH11の壁周溝につき抹消。
SD	10	排水溝	古墳後期	G～I23・24	SD10	SH13D排水溝
SH	11	竪穴住居	古墳後期	H・I23～25	SB11	方形。東西6.6m×南北7.3m。東壁南寄りにカマド？SH12D外側(建替前)。
SH	12	竪穴住居	古墳後期	H・I23～25	SB12	方形。東西6.6m×南北6.5m。SH11D内側(建替前)。
SH	13	竪穴住居	古墳後期	E～G22・23	SB13	方形。東西5.2m×南北6.1m。東壁南寄りにカマド？床面に仕切石溝。排水溝SD10が伴う。
欠番	14		遺物なし	E～G22・23	SB14	SH13D内部区画溝につき抹消
欠番	15		遺物なし	E～G22・23	SK15	SH13D内部落ち込みにつき抹消
SK	16	土坑	不明	F23	SK16	SB20の柱穴
欠番	17		遺物なし	F22	SB17	SH13Dの内部区画溝につき抹消
SK	18	土坑	古墳前期	B23	SK18	小形器台
SK	19	土坑	古墳前期？	C22	SK19	
SK	20	土坑	古墳前期～後期	C22	SK20	
SK	21	土坑	古墳前期～後期	D22	SK21	
SK	22	土坑	古墳前期？	G21	SK22	
SH	23	竪穴住居	古墳前期	D～F20・21	SB23	方形。東西7.8m×南北7.1m。主柱穴4ヶ所。中央に炉。排水溝SD35・36・37が伴う。
SD	24	排水溝	古墳前期	C21～F20	SD24	土器良好。但、埋土上層には5世紀末墳(須恵器1片)～近代までのもの混じる。
SF	25	焼土	不明	C21	SF25	SH27の排水溝。
SH	26	竪穴住居	古墳後期	A・B20・21	SB26	方形。東西5.0m×南北5.1m。北壁中央にカマド？北東・北西・南東隅に貯蔵穴。主柱穴4ヶ所。
SH	27	竪穴住居	古墳前期	B・C19～21	SB27	方形。東西5.8m×南北5.7m。主柱穴4ヶ所。中央北寄りに炉。排水溝SD24が伴う。
SH	28	竪穴住居	古墳前期	G～I19～21	SB28	方形。東西5.8m×南北6.0m。主柱穴4ヶ所。中央に炉。南壁中央に貯蔵穴(周堤を持つ?)。壁周溝一部二重(建替?)排水溝SD38が伴う。
SK	29	土坑	古墳前期～後期	I22	SK29	
SK	30	土坑	不明	B18	SK30	
SD	31	溝	不明	B・C18・19	SD30	
SK	32	土坑	不明	H19	SK32	
SK	33	土坑	不明	F19	SK33	
欠番	34			F19	SK34	SK33周囲の落ち込みにつき、抹消。
SD	35	排水溝	古墳前期	F19	SD35	SH23の排水溝。
SD	36	排水溝	古墳前期	F～G20	SD36	SH23D排水溝。
SD	37	排水溝	古墳前期	I19	SD37	SD38と一通。
SD	38	排水溝	古墳前期	I19	SD38	SH28の排水溝。
SK	39	土坑	古墳前期	B18	SK39	
SD	40	溝	不明	B16・17	SD40	SD40と一通。
SD	41	溝	不明	B16	SK41	SD40C直交する。
SD	42	溝	古墳後期	C16	SK42	SD40C直交する。
SK	43	土坑	不明	C17	SK43	
SK	44	土坑	古墳後期	D17	SK44	須恵器TK10併行。
欠番	45		遺物なし	C16	SD45	SD42Cと一通につき抹消。
SK	46	土坑	遺物なし	D16	SK46	SB91の柱穴
SK	47	土坑	遺物なし	C・D14・15	SB47	方形土坑。調査時は竪穴住居としている。

第IV-1表 坂之上遺跡 遺構一覧表①

遺構番号		性格	時期	グリッド	調査時 遺構名	特徴・形状・計測数値など
SD	48	溝	不明	C13-14	SD48	SK49と重複、前後不明。SD50も一連。
SK	49	土坑	古墳後期	B12-13	SB49	方形土坑。調査時は竪穴住居としている。
SD	50	溝	不明	B13	SD50	SD48cと連続。
SD	51	溝	不明	C13	SD51	
SK	52	土坑	不明	C13	SK52	
SK	53	土坑	古墳後期	B12-13	SK53	須恵器TK23併行。土師器。
SK	54	土坑	不明	C11	SK54	
欠番	55		遺物なし	C11-12	SD55	掘削中に消滅のため抹消。
SD	56	溝	不明	D12	SD56	
欠番	57		遺物なし	D11	SK57	掘削中に消滅のため抹消。
SK	58	土坑	遺物なし	D11	SK58	
SD	59	溝	遺物なし	D11	SD59	
SH	60	竪穴住居	古墳後期	D10	SX60	方形。南北6.2m×東西不明。やや不定形。 須恵器・土師器・サヌカイト片含む
SD	61	溝	不明	B11	SD61	
SK	62	土坑	遺物なし	B10	SK62	
SK	63	土坑	不明	C10	SK63	
欠番	64					抹消
SD	65	溝	物なし	D9	SD65	竪穴住居の壁周溝の可能性あり。
SK	66	土坑	不明	D6	SK66	
欠番	67		遺物なし	B5	SD67	SD71と一連のため抹消。
欠番	68		遺物なし	B5	SD68	SD71と一連のため抹消。
SK	69	土坑	古墳後期	D3-4	SK69	
SK	70	土坑	物なし	C5	SK70	
SD	71	溝	不明	C4	SD71	
欠番	72					抹消
SH	73	竪穴住居	古墳前期	Z-A10	SB73	五角形。長軸7.1m×短軸7.0m。主柱穴5ヶ所。 中央に炉、南壁中央に貯蔵窓。壁周溝あり。 土器多量 S字型B-C類(2時期あり?)。
SK	74	土坑	古墳後期	Y11	SK74	須恵器・土師器良好。埋土に壁土多い。
SK	75	土坑	中世前期	Z11	SK75	瓦器・陶器。古墳時代土器混入多い。
SK	76	土坑	古墳後期以降	Z11	SK76	土師器器片のみ。
SK	77	土坑	古墳後期	A12	SK77	須恵器・土師器。埋土に壁土を少量含む。
欠番	78					抹消
欠番	79			G19	SD79	SH28の内側壁周溝につき抹消。
SA	85	柵列		G~H11	—	SB84に伴うものか
SA	86	柵列		E-F21	—	掘立柱建物の一部の可能性あり
SA	87	柵列	古墳時代前期	D18	—	掘立柱建物の一部の可能性あり
SA	90	柵列		B~D17-18	—	SB83に伴うものか
SA	92	柵列		B15~17	—	SB91に伴うものか
SA	95	柵列		C~D12-13	—	掘立柱建物の一部の可能性あり
SA	96	柵列		B-C11-12	—	掘立柱建物の一部の可能性あり
SA	97	柵列		C-D11	—	掘立柱建物の一部の可能性あり
SA	98	柵列		Z10-11	—	掘立柱建物の一部の可能性あり

第IV-2表 坂之上遺跡 遺構一覧表②

るものな瓦器・陶器の破片が出土しており、中世前期と考えられる。(豊田)

#### 4 遺物

##### (1) 繩文～弥生時代の遺物

別遺構からの混入や、表土から出土したものをお括している。石器(1)・剣片(2)・磨製石斧(3)・縄文土器深鉢(4)・弥生土器甕(5)がある。

##### (2) 古墳時代遺構出土の遺物

S H23出土遺物(6~59) 土師器小型高杯(6~

7)・高杯(8~14)・有孔鉢(14)・有頭鉢(15~16)・甕(17~36)・二重(複合)口縁甕(37~44・59)・広口甕(44・50)・直口甕(45~49)・小型甕もしくは甕底部(51~58)がある。甕には、細筋のタタキを施した一群(17~19・21~22・31)や布留式系の内縁口縁をもつもの(20~28~29)、S字甕(25)、受口甕(26)、それに口縁部が外反して端部が摘み上げられた庄内式類似の甕(23)などがある。44は弥生後期に遡るかもし

遺構番号	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模 東西間(m)×南北間(m)	主軸	方位 (N基準)	備考
SB81	C23	1		古墳前期後半	2(3.5)×3(5.5)	東西	N14° W	独立棟持柱建物
	D23	2,3,4,6	古墳前期後半					
	E23	1						
	D24	1,3,7						
SB82	E24	6			2(3.8)×3(5.3)	南北	N18° W	独立棟持柱建物
	F22	1						
	G22	10						
	F23	9,SK16						
	G23	1,6,						
	F24	SK6,13						
SB83	G24	4,10,			梁行3間(5.3)	東西	N14° W	
	H25							
SB84	I25			古墳時代後期	2(3.2)×3(4.6)	南北	N22° W	独立棟持柱建物
	H20	1,5	古墳時代後期					
	G21	1,2						
	H21	1,3,5						
SB88	H22	12			3(4.0)×3(3.6)以上	東西	N6° W	
	A18	2						
SB89	B18	1,3,6		古墳時代後期	3(5.6)×5(6.7)	南北	N0°	
	C16	1,4						
	C17	3,4,9	古墳時代後期					
	B17	1,2,5,7	古墳時代後期					
	D17	1						
	B18	6,7	古墳時代後期					
SB91	B16	6			2(4.2)×3(5.2)	東西	N44° E	独立棟持柱建物
	C16	SK46						
	C17	6,8						
	B17	3,6						
SB93	B13	1		古墳前期	1(3.4)×2(3.4)	南北	N35° E	
	C13	1,11						
	B14	7	古墳前期					
	C14	1,3						
SB94	C12	1,6			2(2.7)×2(3.0)	南北	N38° E	
	C13	2,14						
	D13	4						
SB99	Z8	2			3(3.5)×3(3.8)	南北	N22° W	
	A8	1						
	A9	1,4,6,12,13						
	Z9	1,2,3,4						
SB100	B6				1(3.4)×2(3.4)	南北	N14° W	
	C6							
SB101	B7				2(3.5)×1(3.9)	南北	N22° W	
	C3	1						
SB101	C4	1,2,3			2(3.5)×1(3.9)	南北	N22° W	
	D4	2						
SB102	Z8	3			3(7.2)×4(10.6)	南北	N21° W	南東隅土坑あり
	A9	8,11						
	Z10	4,5	中世前期					
	A10	1,2						
	Z11	6,8						
	A11	1						

第IV-3表 坂之上遺跡 挖立柱建物一覧表

れない。59は小片であるが複合口縁上に継縫帶を貼付した駿河系の壺であろう。37～42はいわゆる伊勢型二重口縁壺(1)である。古墳時代初頭から前期にかけてのやや時期幅のある資料といえよう。

S K 18出土遺物 (60) 土師器高杯である。

S K 20出土遺物 (61～62) 土師器直口壺 (61)と甕 (62) がある。

S H 27出土遺物 (63～69) 土師器の高杯 (63)・

小型高杯 (64)・楕 (65)・小型丸底鉢 (66)・直口壺 (67～68)・壺底部 (69) がある。

S H28出土遺物 (70～72) 土師器の高杯 (70～71) と砥石がある。71は、タテミガキの内輪脚で脚上に柳描文をもつ東海系の高杯である。

S D36出土遺物 (73～75) 土師器小型高杯もしくは小型器台の脚部 (73)・壺 (74)・小型壺 (75) がある。小型壺は手捏ね系の土器である。

S H39出土遺物 (76～78) 土師器の小型壺底部 (76)・広口壺 (77)・直口壺 (78) がある。広口壺は、口唇を上下に拡張し、端部に刻みを施す。

F 24Pit 5出土遺物 (79) 土師器小形丸底壺である。全体に薄手で、口縁部は短く外側へ外傾する。

F 24Pit22出土遺物 (80) 鉄製鋸である。両端を欠損するが、幅3.5cmの両歯である。

A 9 Pit10出土遺物 (81) 細棒状の鉄製品である。用途不明。

S H73出土遺物 (82～326) 土師器では、高杯・小型高杯 (82～133)・小型器台 (134～135)・手培型土器 (136～137)・有段鉢 (138～141)・大型の有頭鉢 (142～146)・小型有頭部鉢 (147～150)・有孔の鉢もしくは壺 (151～152)・タタキ成形のく字形壺 (153～163)・S字壺 (164～176)・受口壺 (177)・台付壺・脚部 (179～181)・体部ハケないしはナデ調整のく字形壺 (178・182～242)・小型受口鉢 (243)・壺底部 (244)・小型台付壺 (245)・小型壺底部 (246)・小形丸底壺もしくは小型壺 (247～273)・小型無頭鉢 (274)・二重 (複合) 口縁壺 (275～282・284～288)・二重口縁壺もしくは直口壺 (283)・直口壺もしくは短頭壺 (289～309)・壺もしくは壺底部 (310～319) がある。また、広口壺 (320・322)・壺底部 (321)・壺 (324)・脚付長頭壺 (323) は弥生土器であろう。

このほか、薄手の板状鉄器 (325)・ヤリカンナ? (326) がある。板状鉄器は側縁が括れた扇形の形状をとる。

このうち高杯は、全体に布留式平行型でも粗製化した新しいものが大半を占めるが、なかには82～85など庄内式から布留式でも古い頃に遡りそうなものもある。小型器台135は全体にタテミガキであ

るが、器台部外面のみヨコミガキを施す。壺のうち、タタキ壺は平底で、平行もしくは左下がりのタタキを施す。229～242は内輪口縁で端部を肥厚させた布留式系の壺であるが、体部内面をヘラケズリするものとナデ調整のものがある。242は外面ナデ調整で長胴化が進んでおり、182や217なども含め、やや新しい時期に位置づけられるであろう。二重口縁壺では、柳ヶ坪型壺 (285) や漸戸内系の複合口縁壺 (288) なども含む。弥生土器の壺324は外反する短い口縁部の端部を抵張して擬凹線を施すもので、中期に遡る可能性がある。

S H11出土遺物 (327～331) 須恵器杯蓋 (327～328) と杯身 (329～330)、土師器高杯 (331) がある。332は凹石である。杯蓋の天井部の境界は沈線化しており、6世紀前葉以降の所産 (2) であろう。

S H13出土遺物 (333～335) 須恵器杯蓋 (333) と無蓋高杯 (334)、土師器壺 (335) がある。6世紀前葉頃に位置づけられよう。

S H26出土遺物 (336～349) 土師器杯 (336～338)・高杯 (339)・壺 (340～341)・小型壺 (342)・手捏ね土器 (343)、須恵器杯蓋 (344～346)・杯身 (347～349) がある。須恵器は法量、調整とともに時期差を反映した差異が存在しており、5世紀末から6世紀末～7世紀初頭までの時期幅がある。

S B93出土遺物 (350) 土師器直口壺である。頭部にヘラ記号を有する。

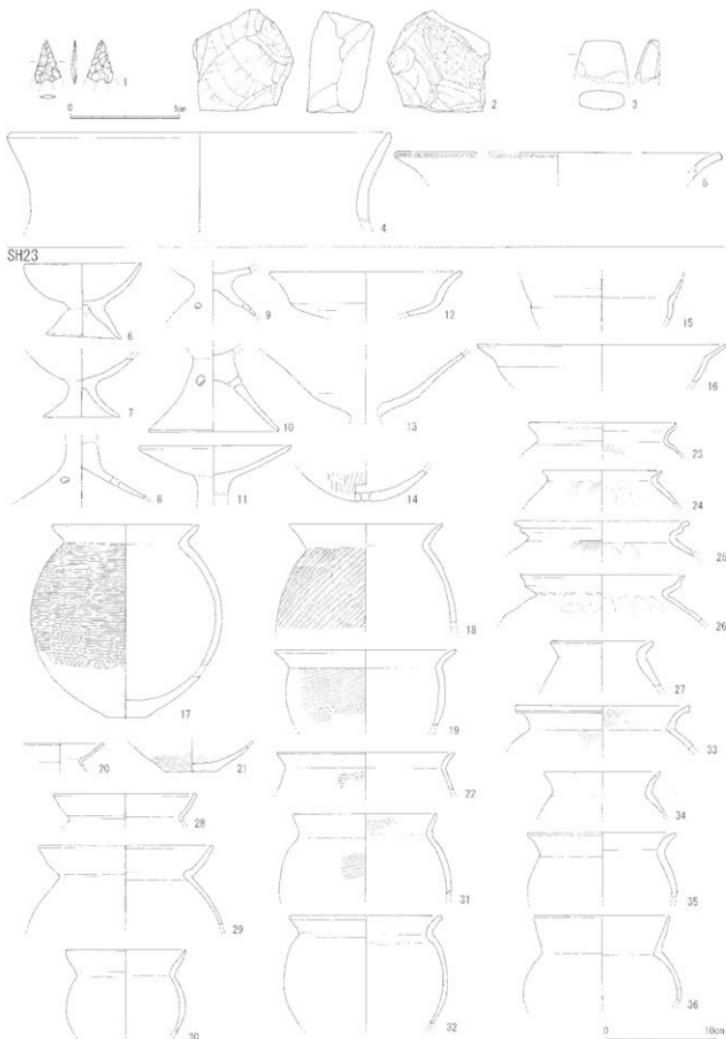
S B81出土遺物 (351) 土師器の粗製の小型壺で、底部は平底である。

S B84出土遺物 (352) 土師器小型壺である。体部は平底気味の球形を呈する。

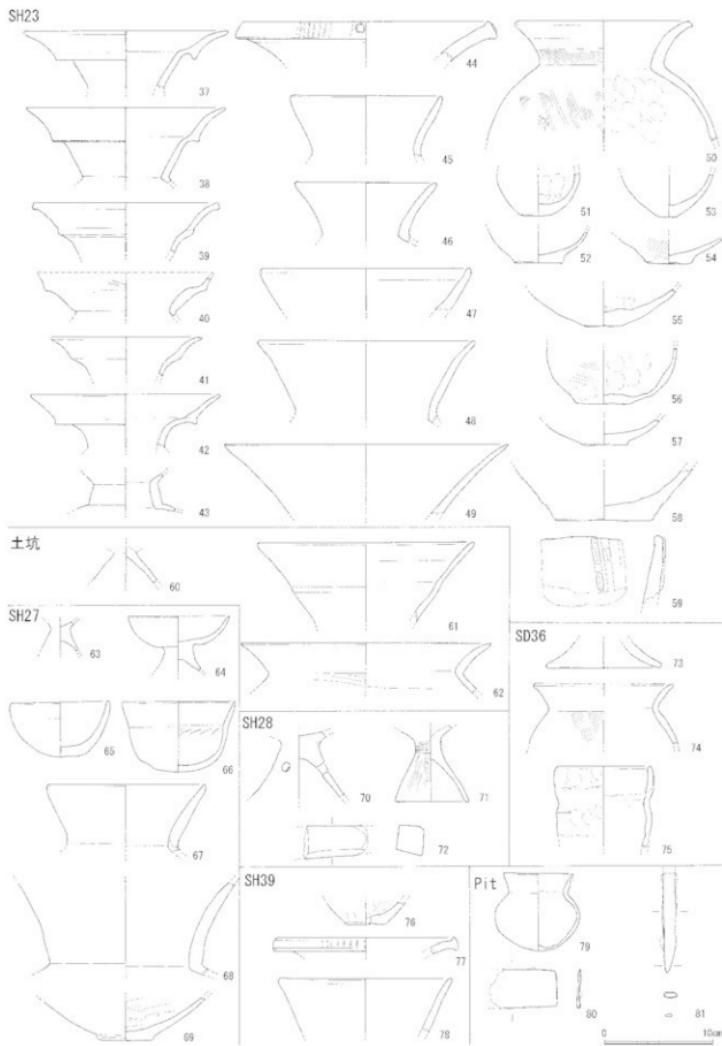
S H49出土遺物 (353) 土師器高杯である。

S K53出土遺物 (354～362) 須恵器杯蓋 (354)・杯身 (355)、土師器壺 (356・358)・高杯 (357・359～362) がある。360など浅い楕状高杯も含み、全体に5世紀末から6世紀初頭頃のものであろう。

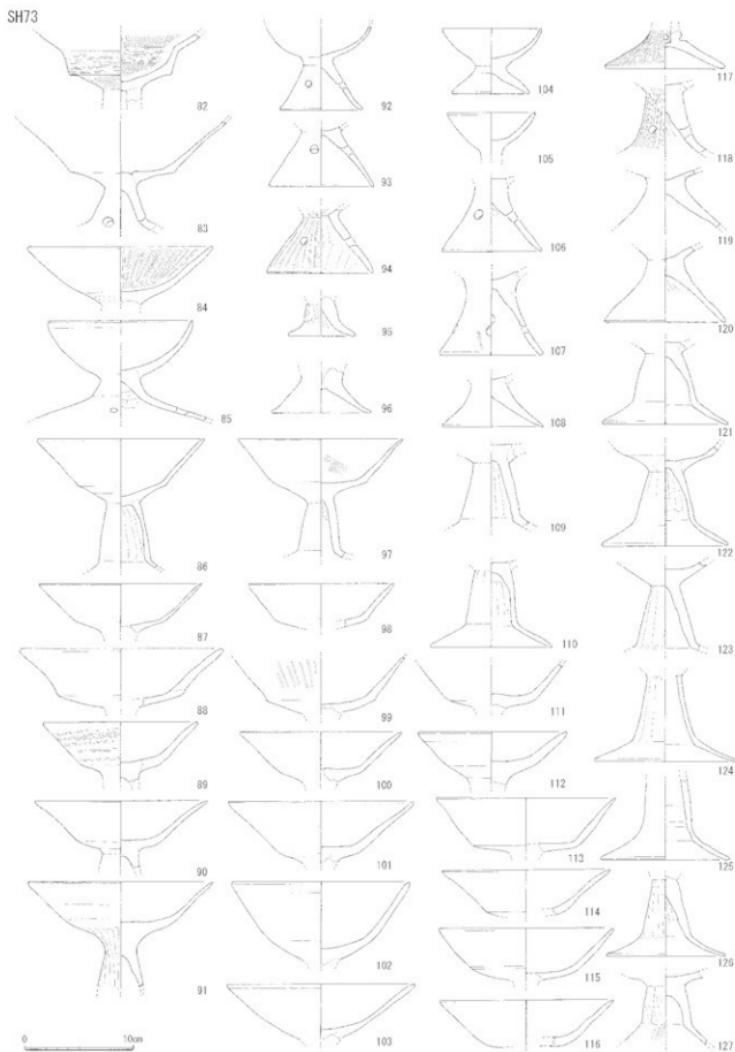
S K74出土遺物 (363～370) 土師器有頭鉢 (363)・壺 (364～365)・高杯 (366)・手捏ね土器 (367)、須恵器杯蓋 (368)・杯身 (369)・壺 (370) がある。壺365は長胴のく字形口縁壺で、体部を板ナデ調整した粗製の丸底壺である。全体に5世紀末頃の所産



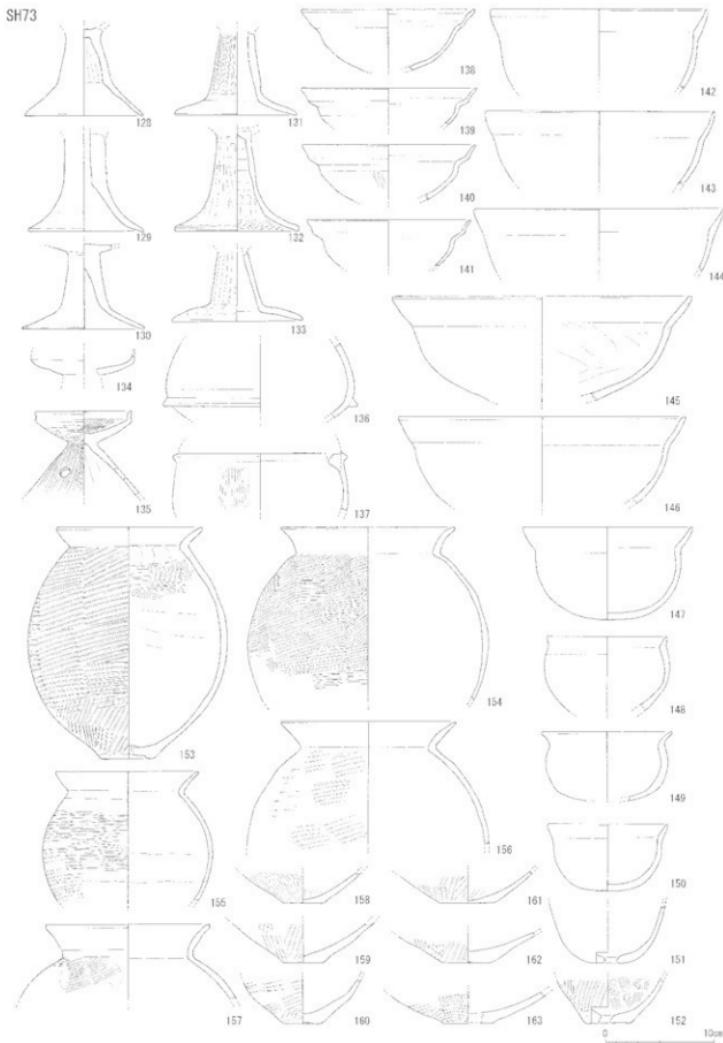
第IV-9図 板之上遺跡 出土遺物① (1~3は1:2、それ以外は1:4)



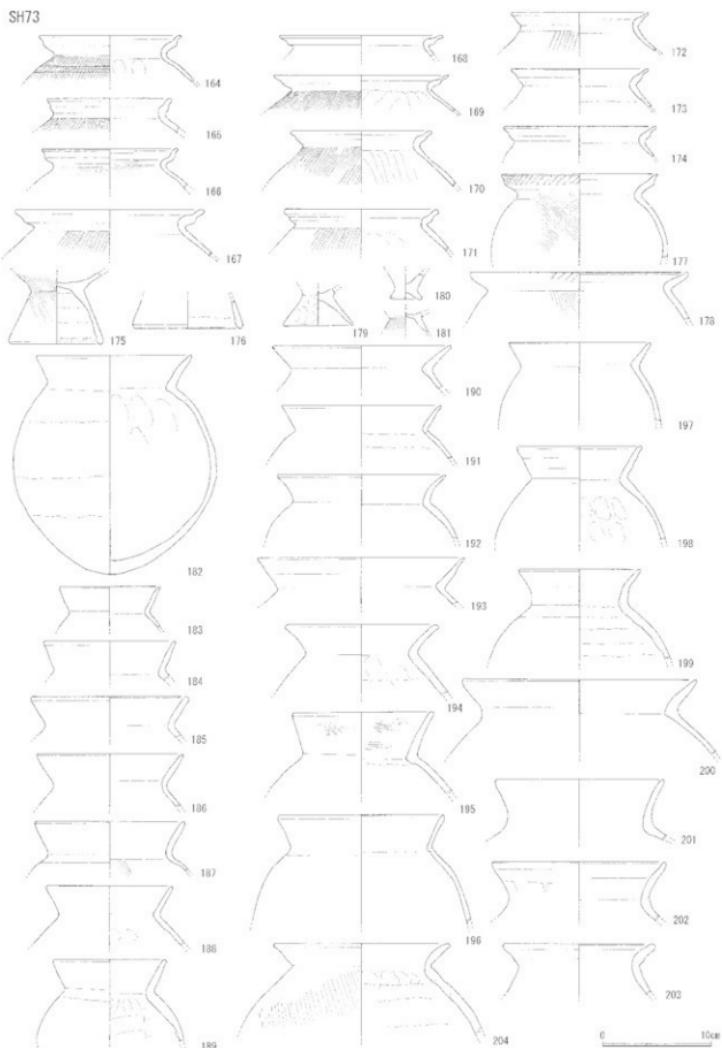
第IV-10図 坂之上遺跡出土遺物② (1:4)



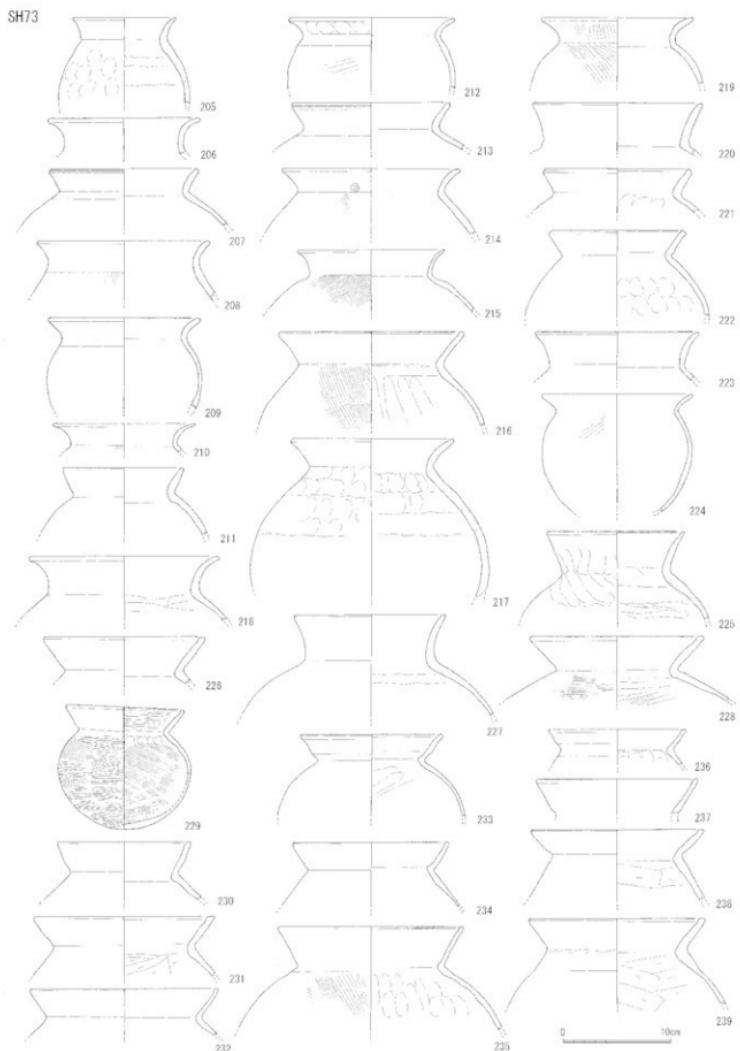
第IV-11図 板之上遺跡 出土遺物③ (1:4)



第IV-12図 板之上遺跡出土遺物④ (1:4)

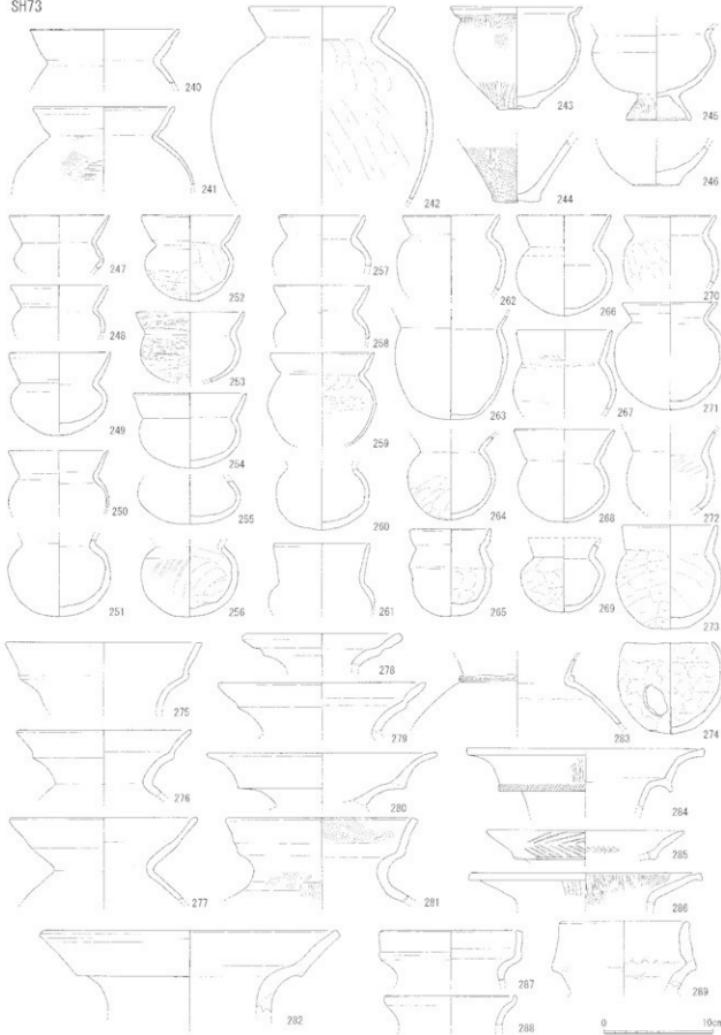


第IV-13図 板之上遺跡 出土遺物⑤ (1:4)

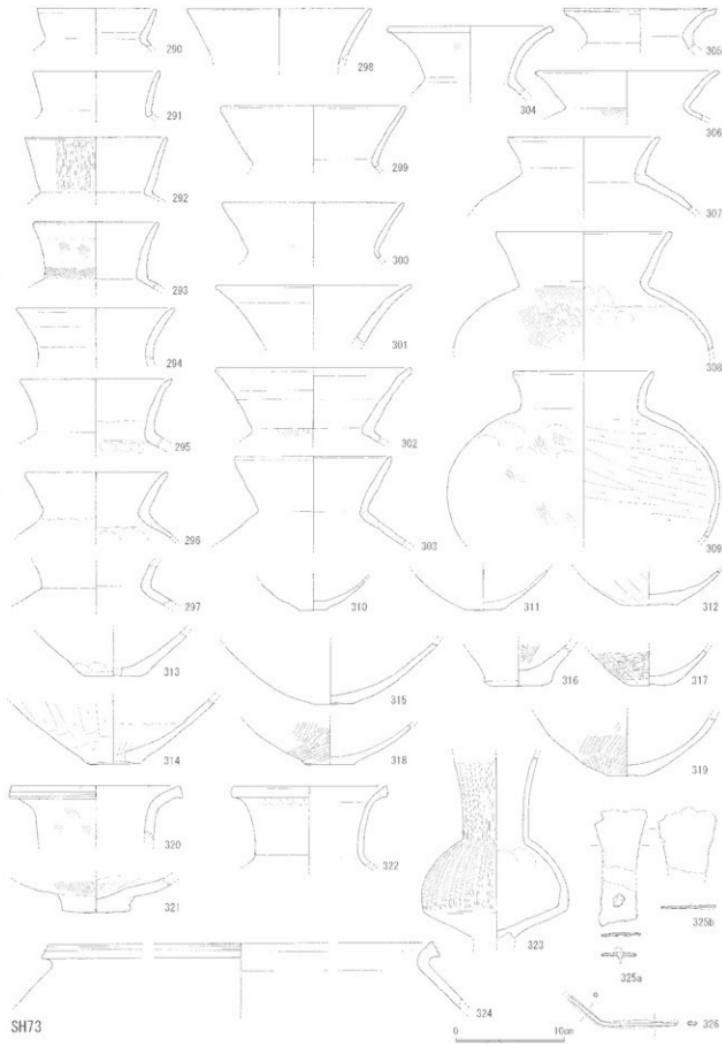


第IV-14図 坂之上遺跡出土遺物⑥ (1:4)

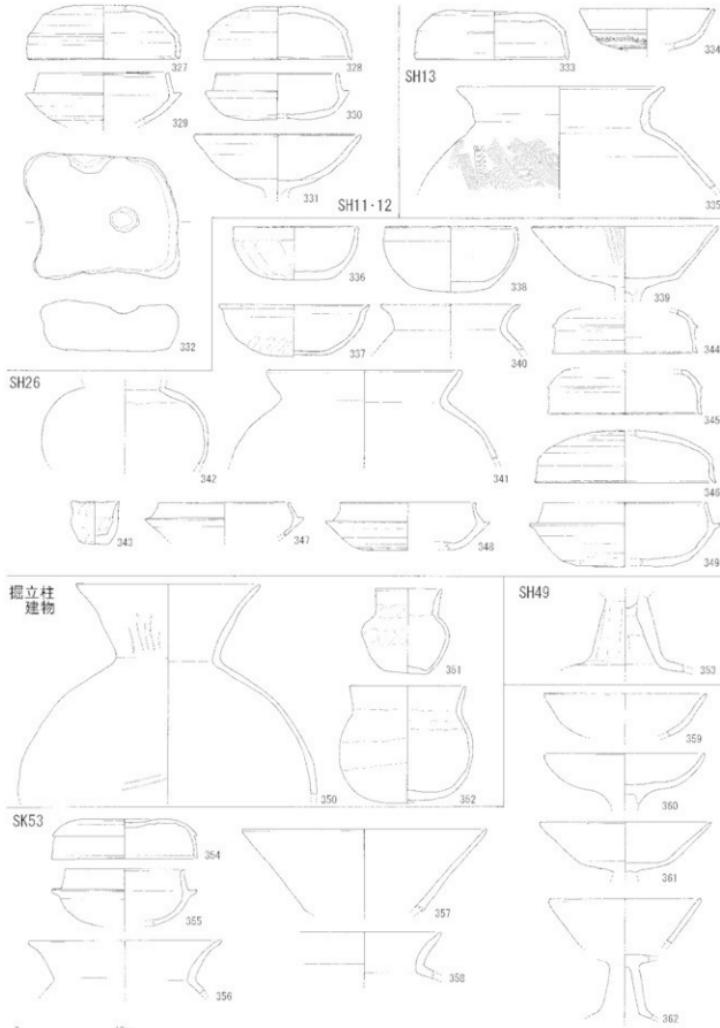
SH73



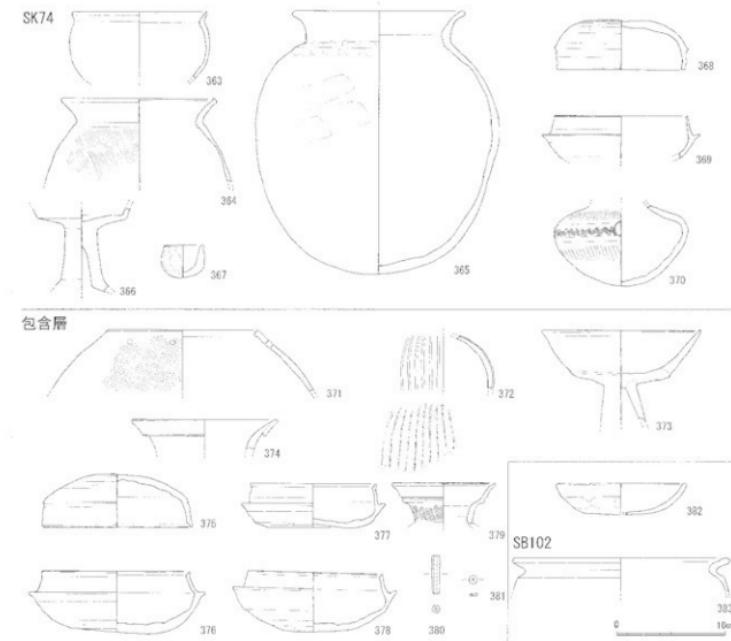
第IV-15図 板之上遺跡 出土遺物⑦ (1:4)



第IV-16図 板之上遺跡出土遺物⑧ (1:4)



第IV-17図 板之上遺跡 出土遺物⑨ (1:4)



第IV-18図 坂之上遺跡 出土遺物⑩ (1:4)

であろう。

### (3) 包含層出土古墳時代遺物（371～381）

表土等から出土したものも一括している。土師器では、無頸壺（371）・壺体部（372）・高杯（273）・壺（374）、須恵器では杯蓋（375）・杯身（376～378）・翫（379）、それに石製品として管玉（380）と白玉（381）を図示した。371は口縁部に沿って円孔を穿つ土器で、脚部を作りであろう。弥生後期に遡るかもしれない。372は胴部片で細い降帯を縱方向に平行して貼付している。

### (4) 中世の遺物

SB99出土遺物（382～383） 土師器皿（382）と羽釜（383）がある。羽釜はいわゆる大和型の範疇に入るものであろう。

## 5まとめ

### (1) 遺構について

調査の結果、坂ノ上遺跡は古墳時代前期と後期を中心とした集落であることが判明した。ただし、五角形住居であるSH73は、出土遺物に弥生時代や古墳時代初頭、前期の土器も含まれており、住居の造られた時期が弥生時代に遡る可能性がある。廃絶した後の埋没過程で、その隙地を利用して遺物が投棄された可能性が考えられる。

さて、坂ノ上遺跡の古墳時代集落は、前期・後期とも竪穴住居だけでなく掘立柱建物も含めて存在することに特徴がある。掘立柱建物の建物形態には、正方形プランに近いものと長方形の側柱建物があり、前者は東柱などは未確認であるが棟持柱を持つものも含まれており、倉庫として使用された可能性がある。調査された範囲内では、これら住居・建物群全体を区画する溝や柵等の施設は未確認で、区画施設の有無を確定することは今後の課題である。

古墳時代後期には、赤目地区は前方後円墳を含む多数の古墳を建造するに至るが、坂之上遺跡はその母体となった有力集落のひとつであったのであろう。

（豊田）

### (2) 遺物について

坂之上遺跡では、竪穴住居から大量の土器が出土しており、なかには他地域系と推定されるものも含んでいる。これらの多くは竪穴住居から出土したものであり、SH73など廃絶が一時期ではないとみ

られるものも含むものの、古墳時代前期を中心とした当地の土器を検討していくうえで、重要な資料となるものであろう。

さて、坂之上遺跡の出土遺物で特筆されるものに、出土量は極めて少數であるが、鉄製品がある。特に、鉄製解はこれまで古墳や横穴への副葬例は知られていたものの、古墳期集落から出土した例はほとんど知られておらず<sup>11)</sup>、極めて重要な資料である。残念ながら、単独のピットからの出土のため、詳細な所屬時期を確定するに至らないが、坂之上遺跡では古墳時代以外の遺構が極めて限定されることや、身の厚みなどから、古墳時代の鋸と考えても別段矛盾はない。もしこれが古墳期のものとすれば、鉄製鋸は古墳出土品を含めても例が少ないとから、当時としては最新の技術を持った工人集団が保持したと思われる。この他、薄手の板状鐵器の存在も注目できる。

こうした最新物品を保持した先進的な集団が当地に存在したこととは、特に古墳時代後期以降、当地が前方後円墳を含む有力古墳を築くに至ったことと連動した動きである可能性もある。 （穂積）

### 【註】

- (1) 川崎志乃「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』vol.13 2002年
- (2) 以下、須恵器は下記文献参照。田辺昭三「須恵器大成」（角川書店 1981年）
- (3) 丹下昌之「古代遺跡出土鋸の研究」『民具研究』110、1995年。ただし、埼玉県本庄市東五十子城遺跡10号住居跡での出土がある。大村直「古墳時代集落出土の鉄製品」（『考古資料大觀7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』 小学館 2003年）



図版 1



清水北遺跡（南西から）



清水北遺跡（北から）

図版 2



清水北古墳（東から）



清水北遺跡SK1（西から）

図版 3



安田氏館跡（南から）



安田氏館跡SK 22（西から）

図版 4



塚本館跡（北から）



塚本館跡（東から）

図版 5



浦遺跡（北西から）



浦遺跡竪穴住居群（南東から）

図版 6



坂之上遺跡（東から）



坂之上遺跡SH 73（南東から）

報告書抄録

ふりがな 書名	いがのこうこしりょう 2 伊賀の考古資料2						
副書名							
巻次							
シリーズ名	研究紀要						
シリーズ番号	16-4						
編著者名	柴山圭子・竹田憲治・伊藤裕作・豊田祥三・總積裕昌						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地	TEL.0596-52-1732					
発行年月日	2007年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	東経	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
清水北遺跡	伊賀市大野木	a376・484	136° 6' 57"	34° 44' 51"	197507~ 09	2,000m <sup>2</sup>	昭和50年度木津川 河川改修事業
清水北古墳	伊賀市界外	a1245					
安田氏館跡	伊賀市界外	a610	136° 10' 55"	34° 44' 49"	19860519~ 19860830	2,000m <sup>2</sup>	
塚本館跡	伊賀市中友生	a628	136° 10' 55"	36° 44' 41"	19860701~ 19860831	3,000m <sup>2</sup>	
田中氏館跡	伊賀市中友生	a608	136° 10' 31"	34° 44' 52"	19870910~ 19870918	300m <sup>2</sup>	
四ノ坪遺跡	伊賀市上友生	a814	136° 11' 23"	34° 44' 33"	19860808~ 19860815	480m <sup>2</sup>	昭和60~62年度 県吉瀬場整備事業
鳥羽遺跡	伊賀市沖	a1071	136° 9' 49"	34° 42' 55"	19870702~ 19870717	310m <sup>2</sup>	
浦 遺跡	名張市中村	418	136° 5' 14"	34° 36' 47"	19850501~ 19850607	1,500m <sup>2</sup>	
坂之上遺跡	名張市赤目町	497	136° 5' 1"	34° 36' 9"	19871105~ 19880123	1,800m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 槽	主 な 遺 物	特 記 事 項		
清水北遺跡	集落跡・城館跡	绳文・中世	堅穴住居、掘立柱建物、区画溝	縄文土器、土師器、陶器(信楽等)	清水北館跡を含む		
清水北古墳	古墳	古墳	横穴式石室、周溝	須恵器			
安田氏館跡	城館跡	中世	堀、土壘、石組構造ほか	土師器、陶器(信楽等)			
塚本館跡	城館跡	中世	堀、柱穴、土坑	土師器・陶器(信楽等)			
田中氏館跡	城館跡	中世	柱穴				
四ノ坪遺跡	集落跡	中世	井戸	土師器・瓦器			
鳥羽遺跡			なし	なし			
浦 遺跡	集落跡	奈良・鎌倉	堅穴住居、掘立柱建物、区画溝	弥生土器	駅家推定地に隣接		
坂之上遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世	堅穴住居、掘立柱建物	弥生土器、土師器	五角形堅穴住居		
	清水北遺跡=清水北館跡の一部とそれに伴う区画を確認。						
	清水北古墳=横穴式石室・周溝を確認。						
	安田氏館跡・塚本館跡・田中氏館跡=室町・戦国期の館跡の調査。						
	四ノ坪遺跡=鎌倉時代後半の集落の一角。						
	浦遺跡=古代駅家想定地に隣接する部分の調査。鎌倉時代後半の大規模屋敷。						
	坂之上遺跡=弥生・古墳時代の集落跡。五角形堅穴住居。						

伊賀の考古資料2  
研究紀要第16-4号

2007(平成19)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 光出版印刷株式会社